

「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き

2017年卒業予定者から適用

「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き

2017年卒業予定者から適用

ディプロマプログラム (DP)

「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き

2015年3月に発行の英文原本 *Creativity, activity, service guide* の日本語版
2015年8月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト : www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2015

国際バカロレア機構 (以下、「IB」という。) は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは www.ibo.org/copyright をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール : sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本書の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
CASとDP	6
CASの本質	10
ねらい	12
CASの学びの成果	13
CASを学ぶ生徒の責任	15
概要	16
CAS活動	16
CASの段階表	19
CASの3つの要素	22
CASプロジェクト	30
振り返り	33
CASポートフォリオ	38
CASプログラムの開発	40
CASプログラムを支える6つの構成要素	40
CASコーディネーターとサポートスタッフ	41
リソース	44
CASハンドブック	46
リスクアセスメント	47
活動状況のモニタリング	48
CASプログラムの見直し	51
付録	53
異なる文化的背景をもつコミュニティとの取り組み	53
多様な学習方法とその支援の必要性	54
CASの学びの成果の解説文	56

教師用参考資料	59
CASプログラムの評価	60
参考文献	61
用語解説	62

本書の目的

本資料は、学校において「創造性・活動・奉仕」(CAS)の準備、計画を効果的に行うための手引きです。CASコーディネーターやアドバイザーを対象としていますが、生徒や保護者にCASについて説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター(OCC)のCASのページで入手できます。OCC (<http://occ.ibo.org>)は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア (<http://store.ibo.org>)で購入することもできます。

その他のリソース

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

CASに関するもうひとつのリソースとしては『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料(TSM)』があります。これもOCCに掲載されています。

謝辞

IBは、本資料を作成するにあたり、時間やリソースを惜しみなく提供してくださった教育関係者や提携校の皆様に感謝の意を表します。

2017年卒業予定者から適用

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの科目グループが中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各学問領域から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの科目グループからそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、IBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題（コースワーク）を課しています。

DPモデルの「コア」

プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの活動は、DPで学ぶすべての生徒にとって必修となります。

- ・「知の理論」（TOK: theory of knowledge）では、生徒は「知識の本質」について考え、あらゆる科目の学習プロセスについて考察し、その互換関係を見つけ出して理解するよう促されます。
- ・「課題論文」（EE: extended essay）は、最大4,000語（日本語の場合は8,000字）という相当な長さの学問的論文で、生徒はこれを執筆する作業を通じて、自分で選んだ特に興味のあるトピックについて深く探究することになります。これにより、大学レベルで期待される独自のリサーチスキルが養われます。
- ・「創造性・活動・奉仕」（CAS: creativity, action, service）では、楽しくかつ有意義な活動を幅広く経験するとともに、CASプロジェクトにも取り組みます。

「コア」の一貫性

DPの3つの「コア」（TOK、CAS、EE）は、全人教育の手段として、DPのカリキュラムの作成当初から企画され導入されました。「コア」は3つの異なる、しかし相互につながりをもった要素で構成されていますが、特筆されることはなくとも、その相互のつながりと関係性は明らかです。

TOK、CAS、EEそれぞれのねらいと相互の関係性を明確に特定し明示することによって、IBの基本にある全人教育の原則は確実に守られると私たちは考えています。「コア」を一貫した観点からとらえることで、具体的には以下のことが達成できると考えています。

- ・ さまざまな学びの関連性を深める
- ・ 同時進行する学びを支える
- ・ IBの一貫教育および学習者像を支える

- ・ 学問領域に対する視野の幅を広げる

一貫性とは、類似性を意味するものではありません。ここでの一貫性とは、「コア」の3つの要素が互いに補完しあい同時に作用し合いながら、共通の目標を達成することを意味します。「コア」の3つの要素はすべて、以下の3つの一貫したねらいに根差していなければなりません。

- ・ 各学問領域と相互に支え合うこと
- ・ 国際的な視野を育むこと
- ・ 自己認識とアイデンティティーの感覚を養うこと

各学問領域と相互に支え合う

「コア」はDPの本質であると見なされています。学問領域は「コア」とは別のものですが、当然のことながらつながりがあります。「コア」は学問領域によって豊かな経験となり、学問領域は「コア」によってより深みを増します。「コア」の3要素を担当する教師は、どのようにすれば生徒がDPで学習する科目のより深い理解にTOK、CAS、EEを役立てられるかを注意深く検討し、計画する必要があります。これには以下のような例が考えられます。

- ・ TOKで身につけた^{クリティカル・シンキング}批判的思考のプロセスを科目の学習に応用する
- ・ CASで奉仕を通じて学ぶ機会を得ることにより、生徒がもっている既存の科目知識を活用しながら、その領域での新たなそしてより深い知識を構築できるようにする
- ・ EEでグローバルな意義をもつトピックや問題点を研究課題として定め、1つまたは複数の学問領域の枠組みを用いて探究する

国際的な視野を育む

「コア」が目指すことのひとつは、「国際的な視野を育む」ことであり、責任ある地球市民の育成を究極の目標としています。「多様な文化を理解・尊敬する精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ生徒たちを育成する」と同時に「世界各地で学ぶ児童生徒が、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人となるため、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかける」という「IBの使命」が、「コア」の大きな原動力となっています。

このため「コア」は、グローバルな意義をもつ問題の探究を促し、それを通じて「ローカル」と「グローバル」の間のつながりを生徒が考察できるように実施されるべきです。また、他の人のものの見方やその背景について考えることを促し、そこで生徒が身につけた信条や価値観がその後の人生にも反映されていくよう促します。これには以下のような例が考えられます。

- ・ TOKで異なる文化に基づくものの見方があることを理解し、さまざまな文化伝統がどのように私たちの現在の知識の構築に役立って来たかを考える
- ・ グローバルな意義をもつ問題をローカルな観点から探究して、実践できるようなCASプロジェクトを検討する
- ・ EEで、グローバルなテーマについて総合科目的な研究を行う「ワールドスタディーズ」に取り組むことを奨励する

自己認識とアイデンティティーの感覚を養う

「コア」の役割は、生徒たちの心を大きく動かし、その人生観をも変えてしまうことです。生徒が自分の価値観や行動について考え、この世界における自分の役割を理解し、そして自己のアイデンティティーを形成できるような機会をもたせることがねらいです。実践方法として以下のような例が考えられます。

- ・ TOKで、異なるバックグラウンドや異なる見方をもった他者と話すことにより、自分自身の価値観を問い直す機会を設ける
- ・ CASで、他人の助けが必要な人を支援する自らの取り組みを評価し、擁護という考え方について追求する
- ・ EEを書き進めるプロセスを振り返り、それを通じて自分の長所や成長が必要な領域を特定するよう促す

CASとDP

CAS活動は、DPの各科目グループと関連づけることができます。教師は適切なアドバイスを与えることによって、生徒が科目とCAS活動の間につながりを見い出そうとする過程を支援します。これにより、意義深い議論と実際の経験という2つのことを通じて、生徒は科目の学習とCASの学習の両方に重要性を見い出すことができるでしょう。生徒に意欲とやりがいをもたらす、科目の理解と知識を深めると同時に、科目に対してさまざまなアプローチを試してそれを楽しめるような機会をつくります。ただし、履修科目の内容と重複することはできず、それとは区別しなければなりません。

DPの科目グループは、それぞれにCASに役立てることができます。以下に例を示しますが、これらはあくまでも提案であり、教師や生徒は、独自のつながりをできる限りつくらなければなりません。

グループ1：創作的な書きものに取り組む、目の不自由な人のためにオーディオブックを作成する、脚本を書き映画を制作する、など。

グループ2：語学のレッスンを必要としている人に提供する、テクノロジーを活用して言語ガイドを開発する、ウェブサイトや他のコミュニケーション手段を利用して学習している言語の文化の認知度を高める、など。

グループ3：高齢者向けの施設に暮らしている人々に経験談を語ってもらい、それを家族の回顧録として記録する、コミュニティのニーズを解決する慈善グループを結成する、コミュニティの庭園づくりに参加する、など。

グループ4：低学年の子供たちのための天文学クラブを結成する、自然保護区の保全を手伝う、「(車ではなく)歩いて学校へ行こう」というグループへの参加を友人に呼びかける、など。

グループ5：数学の苦手な年下の生徒に教える、地域の慈善団体の会計を管理する、学校内で数学的な知識を必要とする宝探しゲームを企画し、日々の暮らしにおける数学の重要性を示すような活動をする、など。

グループ6：舞台発表につながるダンスのレッスンを受ける、コミュニティの美術展示会に参加する、病院や高齢者施設のためのコミュニティ活動(公演や写真展など)に参加する、など。

DP科目とCASを関連づけるアイデアは、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料(TSM)』を参照してください。

CASとTOK

TOKは、経験を知識に変えていく道しるべという役割を担っています。そしてその経験には、もちろんCAS活動も含まれます。TOKは、^{クリティカル・シンキング}批判的思考と「知る」に至るまでのプロセスを探究するコースで、生徒がもっている世界についての知識や、世界に対する理解の根底にある思い込みや、決めてかかっていることなどについて深く検討します。

TOKにおいて、「知る人」の知識源は2つで、それは**個人的な知識**と**共有された知識**です。CAS活動は、生徒の個人的な知識の重要な源となり、多様性に富んだ、かつ挑戦しがいのある環境のなか、世界についての認識を得る機会をもたらします。個人がどのようにして知識を構築するのかという考察を、コミュニティがどのようにして知識を構築するのかという考察に広げれば、それは共有された知識について考えることとなります。CASでは、生徒はTOKの議論を応用して、さまざまなコミュニティや文化への理解を深めることができます。

また、CASは、TOKコースの他の部分ともつながりがあります。例えば、「創造性」の活動として美術のプロジェクトに取り組む生徒は、芸術という知識の領域における「知るための方法」として、「直観」と「想像」の役割について考えることができるかもしれません。また、TOKの評価課題に取り組んでいる途中でCASとTOKの間のつながりに気づく生徒もいるかもしれません。例えば、CAS活動を通じて、TOKの口頭プレゼンテーションで紹介するにふさわしい社会での実例を取材できることもあるでしょう。さらには、CAS活動から、どのような知識から質問は浮かび上がってくるのか、ということを考えるようになるかもしれません。

CASとTOKはいずれも、生徒が自分の信念や思い込みを振り返るよう促すことで、より思慮深く、責任感と目的意識のある生活を送れるよう導いていきます。

TOKの倫理

CASは、生徒が「選択と行動の倫理を認識し、考察する」(学びの成果7) ことを助けます。これは、「IBの使命」と「IBの学習者像」で述べられている倫理原則に即しています。これには、生徒が挑戦を通じて有意義な成果を得るために、価値観、態度、行動について探究を深めることが含まれます。CAS活動の過程では、必然的に多数の倫理的な問題が浮上し、生徒があらかじめもっていた考え方や直感的な反応、または行動の仕方に反する状況が浮上する可能性があります。CASで生徒が倫理的な問題を感じとり、考え、行動する過程においては、人間として成長していけるよう、学校がサポートする責任を負っています。

学校がCAS活動を活用して、TOKで探究した倫理の体系の理解に役立てることは重要です。CASコーディネーターは、生徒の取り組みを指導する際に、生徒が倫理の原則を認識できるよう支援します。その結果、生徒は、CAS活動を計画・実践するなかで自分の選択と行動がどのような結果を招くかについて、認識を高めることができます。倫理観を養うことにより、自分の行動に対して責任をとらなければならないことを生徒が理解し、正しい行動をとるようになります。

CASコーディネーターは、慎重に生徒に接しなければなりません。異なった世界観をもつ家族や文化的バックグラウンドを生徒が有している、その結果、個人的な価値観や信念が異なって形成されている可能性があるためです。違いを認識し尊重することは重要であると同時に、CASの基本となる価値観や倫理的行動は、IBの学習者像に一致していなければなりません。

CAS、EE、「ワールドスタディーズ」のEE

CAS活動を通して、生徒は特定のグローバルな問題にローカルなレベルで触れる結果、その問題を学問的に研究して理解を深めたいと思うかもしれません。EEと「ワールドスタディーズ」のEEはいずれも、CASの過程で生じた問題を探究できる機会となります。

EEでは、DPのいずれか1つの科目とつながりのある個人的な関心事項をリサーチして探究することができます。

「ワールドスタディーズ」のEEでは、グローバルな意義をもつ現代の問題がローカルなレベルに表れているのをとらえて、深く掘り下げた学際的な研究をすることができます。生徒は、次のグローバルなテーマのいずれかから1つトピックを選んで探究できます。

- ・ 言語、文化、アイデンティティー
- ・ 科学、技術、社会
- ・ 平等と不平等
- ・ 紛争、平和、安全保障
- ・ 経済と環境の保持
- ・ 健康と発達

「ワールドスタディーズ」のEEは、これらのテーマを総合的に理解して、その意義を認識する機会をもたらします。その結果、CASの体験にも深みが増すという相乗効果が期待されます。

IBの国際的な一貫教育におけるCAS

IBのプログラムはすべて、認知面、社会面、感情面、身体面の健全な発達を旨としており、地域、国、世界のコミュニティに積極的かつ思いやりのある一員として参加できるようになる機会を生徒に提供します。

CASは、初等教育プログラム（PYP）と中等教育プログラム（MYP）の教育を基礎とし、その上に発展させることを意図して作られています。そうすることで、IBの国際的な一貫教育のなかでの継続性を確立しています。CASは、IBの学習者像を継承していくDPの特徴を示しています。IBの理念を自らの行動で表わす学習者像は、IBの教育理念の根底にある価値観を共有し、グローバルなコミュニティをつくるという高い目標を簡潔に述べています。

CASを通して、生徒は、PYPとMYPで触れ、培ってきた学習のアプローチを継続して学んでいきます。学習のアプローチでは、人間性と社会性の両面で成長することが奨励されており、具体的には、協力、問題解決、対立解消、創造的思考や批判的思考などのス

キルを向上させ、さらに自分のアイデンティティを確立することが求められています。CASでは、生徒が批判的に振り返る能力を継続して育み、自分が考えたこと、努力したこと、達成したことを分析する機会を提供していきます。その振り返りの内容は経験に比例して洗練されていきます。また、やりがいのある目標を設定し、意志を固め、達成するまでやりぬくための方法も、生徒は学びます。

CAS活動とCASプロジェクトによって、学習へのアプローチのさまざまな要素や、IBの一貫教育全体にわたって重視され育成される学習者像の特質が、実生活の場で活かされます。さらに、生徒はCASに取り組むことで、個人の責任と共同責任の感覚を養い、チームワークや他者と共に活動を行うスキルを身につけていきます。

CASの本質

「…何かを信じているのであれば、単に考えたり話したり書いたりするだけでなく、行動しなければならない。」

ピーターソン (Peterson, 2003)

CASはDPの本質的な要素のひとつです。包括的な学びの体験となるCASは、PYPとMYPで培った個人としての、そして他者との人間関係のなかにおいての学びを強化し、拡張するためのものです。

CASは、「**創造性**」、「**活動**」、「**奉仕**」という3つの要素で構成されていて、それぞれ以下のように定義されています。

- ・ **創造性** (creativity) — アイデアを探究しそれを広げることで、独創性や自分の解釈に基づいた作品やパフォーマンスを創造すること
- ・ **活動** (activity) — 健康的なライフスタイルに寄与する身体的な活動を実践すること
- ・ **奉仕** (service) — コミュニティーの真のニーズに対応するために他者と共に活動を行い、かつ相互扶助の取り組みに従事すること

私たちの共有する価値観を照らし出す灯りのように、CASは、IBの学習者像の特質を現実的かつ実際的な方法で生徒たちが実践し、個人として成長するとともに、他者との関係における自分の役割を認識する機会を提供します。個人や集団のさまざまな経験を通じて自分の興味のある分野を探究し、自分の情熱や個性やものの見方を表現することで、生徒は様々なスキル、物事に対する姿勢、そして気質を養っていきます。CASは、レベルの高い学問的なプログラムを補完するものであり、**自己決定し、他者と共に活動し、目標を達成し、その達成感を得る**機会をもたらします。

CASは、生徒の内面の、そしてその社会性の成長を促します。有意義なCASのプログラムとは、自分と他者を発見する旅路のようなものです。多くの生徒にとって、CASは非常に大きな意味を持ち、人生を変えるほどの経験となります。生徒はそれぞれに異なる出発地点からスタートし、それぞれに異なるニーズや目標をもっています。このためCASのプログラムは、生徒の興味、スキル、価値観、バックグラウンドなどに応じて異なります。

学校と生徒は、DPの他の要素と同様にCASを重視する必要があると、CASのプログラムに取り組む時間を十分に確保しなければなりません。CASの段階表（後述）を効果的に利用することで、生徒にとって建設的かつ連続性のある枠組みとプロセスを提供することができます。

CASを成功裏に完了することは、IBのディプロマを取得するうえで必須の要件です。公式に評価はされませんが、生徒は自分のCAS活動を振り返って、7つの学びの成果を達成したことを各自のCASポートフォリオで示す必要があります。

CASのプログラムは、DPの開始と同時に正式に開始し、定期的に、理想的には週1回のペースで少なくとも**18か月**にわたって継続し、「創造性」と「活動」と「奉仕」を合理的なバランスで実践します。

CASを行う生徒はすべて、CASに取り組んだ証拠として**CASポートフォリオ**に記録をつけ、完成させます。CASポートフォリオとは、CAS活動を示す証拠を集積したもので、生徒が自分の経験を振り返るのためのものであり、成績に反映されるものではありません。

CASは、7つの**CASの学びの成果**の達成をもって完了したことになります。生徒は、CASポートフォリオにそれぞれの学びの成果の達成を示す証拠を記録し、それを学校に提出します。

CAS活動は、CASの3つの要素のいずれか1つまたは複数にかかわるものとし、CAS活動は、単発の活動でも複数回の継続的な取り組みでも構いません。

生徒はまた、最低1か月にわたる**CASプロジェクト**に取り組み、主体的に行動して、困難なことでもやりぬく力を発揮し、問題解決能力、そして意思決定能力を養います。CASプロジェクトは、CASの要素のいずれか1つだけを取り上げたものでも、2つまたは3つの要素を組み合わせたものでも構いません。

生徒は、CAS活動とCASプロジェクトの枠組みとして、**CASの段階表**（調査、準備、行動、振り返り、実証）を使用します。

生徒は、CASコーディネーターまたはCASアドバイザーと計3回の正式な**面談**を行い、その内容は記録されます。最初の面談はCASプログラムの開始時、2回目の面談は1年目の終了時、3回目の面談はCASプログラムの終了時に行います。

CASでは**振り返り**を重視します。振り返りは、深みのある豊かなCAS活動を積み重ねるうえで不可欠です。振り返りを通じて生徒は、自分の考え、スキル、長所、短所、成長すべき点を探究できるようになり、それまでに学んだことをどのようにして新しい状況に応用するかを考えられるようになります。

ねらい

CASプログラムのねらいは、次のような生徒を育てることです。

- ・ CASの幅広い経験を楽しみ、その重要性を認識する人
- ・ 目的意識をもって自分の経験を振り返る人
- ・ 目標を設定し、効果的な方法を模索し、自分の成長のために必要な次の行動を見極める人
- ・ 新しい可能性を探り、新しい挑戦を歓迎し、新しい役割に順応する人
- ・ 計画的、持続的、かつ他者と共に活動するCASプロジェクトに積極的に参加する人
- ・ 地域や世界のコミュニティーの一員として、他の人や環境に対して責任を負っていることを理解する人

CASの学びの成果

CASは、18か月にわたるCASのプログラムへの取り組みを通じて、7つの学びの成果を達成することにより修了します。学びの成果とは、CASのプログラムの過程で生徒ができるようになることを明確に記述したものです。目的のはっきりした有意義なCAS活動を通じて生徒は7つの学びの成果を達成するために必要なスキル、特質、理解を習得します。

学びの成果のなかには、何度も達成するものもあれば、それほど頻繁には達成しないものもあります。CAS活動がすべてCASの学びの成果につながるわけではありません。生徒は、CASのプログラム期間中にそれぞれの学びの成果を少なくとも一度は達成したことをCASポートフォリオで示し、その証拠を学校に提出します。CASコーディネーターは、CASの学びの成果それぞれに関して何をもって達成した証拠と見なすかについて、生徒と合意しなければなりません。多くの場合、CASの学びの成果を達成した証拠は、生徒の振り返りの中に見て取ることができます。

CASには、次の7つの学びの成果があります。

学びの成果 1	自分の長所と成長すべき点を認識する
解説文	さまざまな能力とスキルをもった個人として自分のことを見ることができ、能力やスキルのなかには比較的得意なものとそうでないものがあることを自覚している。
学びの成果 2	課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得している
解説文	挑戦する課題とは、これまでにしたことのないものでも、過去の経験を発展させたものでもよい。新しく習得したスキルは、未経験なもの、あるいは経験したことのある分野を向上させることで得たものでもよい。
学びの成果 3	自らCASを計画し開始することができる
解説文	ひとつまたは一連の経験のCASの活動としてのアイデアを思いついた段階から、計画を実行する段階までを、詳細に説明することができる。これは他者と共に活動を行い達成されることでもよい。過去の経験を発展させたり、新しいアイデアやプロセスを考案したりすることで、自らの知識や認識を示すことができる。
学びの成果 4	CAS活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す
解説文	CAS活動に定期的にかかわり、積極的に取り組んでいることを示す。
学びの成果 5	自らのスキルを活かし、また他者と共に活動する意義を認識する
解説文	CAS活動を通じて学んだ、他の人々と共に働くことの良さと難しさを明確に提示し、それについて客観的に論じることができる。

学びの成果6	グローバルな課題に取り組む
解説文	グローバルな課題を認識し、それらに対する自らの考えを示し、責任感のある決断をして、地域、国、または国際的なレベルで問題に対応する適切な行動をとることができる。
学びの成果7	選択と行動の倫理を認識し、考察する
解説文	CAS活動を計画・実践するなかで、自分の選択や行動には結果が伴うと認識していることを示す。

CASの学びの成果は、その解説文を使ってさらに深く説明することができます。CASの学びの成果と解説文についての詳細な情報は、このガイドの付録を参照してください。

CASを学ぶ生徒の責任

CASプログラムを行う生徒にとって重要なのは、CAS活動を自らの経験として受け止め、自分で選択し、楽しむことです。DPの全期間を通して、生徒はさまざまなCAS活動をします。理想的には、週1回のペースで最低18か月にわたって、これに取り組みます。また、少なくとも1か月以上にわたるCASプロジェクトに最低1回取り組みます。そして、CAS期間中の重要なポイント、ポイントでCAS活動を振り返り、CASポートフォリオに記録していきます。CASポートフォリオの記録は、7つの学びの成果をCASコーディネーターが認めるレベルに達成したことを示す根拠となります。

CASを行う生徒には、以下のことが期待されています。

- ・ 自発的にCASに取り組む
- ・ CASで期待されていること、およびCASの目的を明確に理解する
- ・ IBの学習者像と使命を参照し、自分の価値観、態度、特質を高める
- ・ 自分なりの目標を定める
- ・ CAS活動についての計画をCASコーディネーターまたはアドバイザーと話し合う
- ・ CASの段階表を理解し、必要に応じて活用する
- ・ CAS活動に参加し、時には自発的に活動するほか、少なくとも1回はCASプロジェクトに取り組む
- ・ 自分の興味、スキル、才能を的確に認識し、CASのプログラム期間中にこれらがどのように発展していくかを観察する
- ・ CASポートフォリオに活動の記録をつけて、7つの学びの成果に達成した根拠を示す
- ・ 振り返りのプロセスを理解し、CAS活動を振り返るべき時期を確かめる
- ・ CASプログラムで自分が達成したことを示す
- ・ CASのコーディネーター、アドバイザー、またはスーパーバイザーと公式・非公式な面談を行い、コミュニケーションをとる
- ・ 自分のCASのプログラムで、創造性、活動、奉仕の適度なバランスがとれているかを確認する
- ・ 適切かつ倫理的に判断し、行動する

CAS活動

CAS活動とは、CASの3つの要素のうち1つ以上にかかわる取り組みを指します。

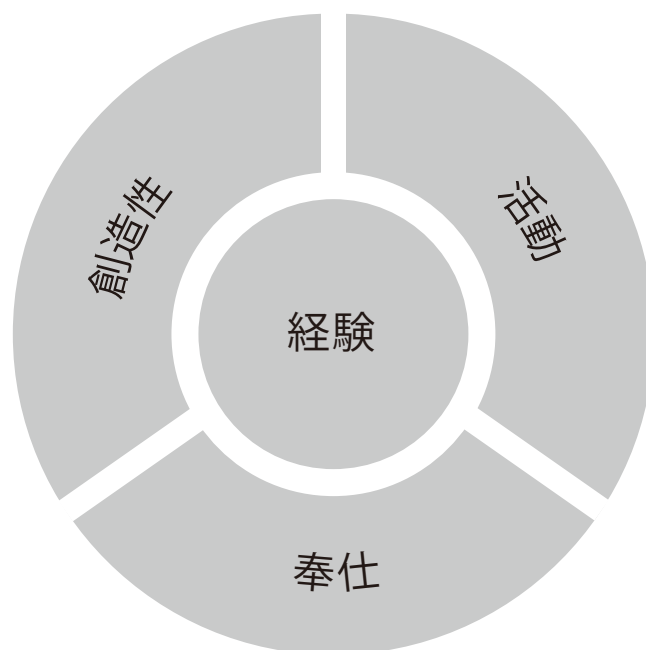


図2

CAS活動

CAS活動は、単発の、あるいは複数回にわたる継続的な取り組みとすることができます。

CASプロジェクトとは、1か月以上にわたって継続して共に活動するCAS活動です（詳細は「CASプロジェクト」のセクションを参照してください）。

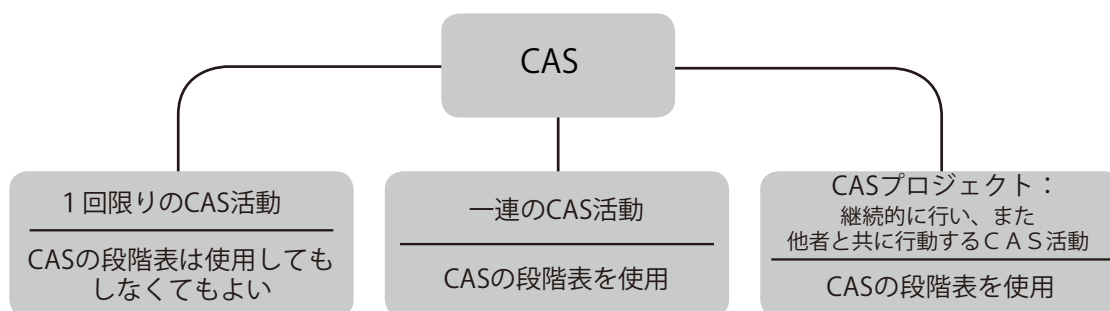


図3

CAS活動と段階表

生徒のCASのプログラムには通常、計画的な経験とそうでない活動、また単発の活動の活動と継続的な活動の両方が含まれます。これらはすべて貴重な経験であり、人間としての成長につながる可能性があります。1回限りの無計画な活動だけでは、有意義なCASのプログラムにはなりません。意欲的に取り組めるCASプログラムをつくるには、計画的・継続的なCAS活動が奨励されます。

CAS活動には、CASの要素のいずれか1つまたは複数を取り入れます。例えば、以下のような経験が考えられます。

- ・「活動」の単発の活動として、登山に行く
- ・「奉仕」の継続的な活動として、介護施設を何回も訪れる計画を立てる
- ・「活動」と「奉仕」の継続的な活動として、何人かの生徒で協力して地域コミュニティのためのバスケットボール大会を計画し開催する

CAS活動のガイドライン

CASコーディネーターは、何をもちてCAS活動といえるかを生徒が理解できるよう支援します。生徒が提案してくるCAS活動を検討する際に適用すべきガイドラインは4つあります。

CAS活動は、次の条件を満たす必要があります。

- ・CASの要素の少なくともいずれか1つに該当する
- ・生徒自身の興味、スキル、才能、または成長の機会に即している
- ・IBの学習者像の特質を養う機会となる
- ・DPのコースの必須要件には含まれておらず、その目的で使用されることがない

CAS活動について生徒が決定するのを支援する際には、以下の質問を生徒に問いかけてみるのもよいでしょう。

- ・楽しい経験になると思いますか。
- ・自分の興味やスキルや才能を発展させるのに役立つ経験ですか。
- ・その活動からどのような新しい可能性や挑戦がもたらされると思いますか。

- ・ その活動によって、自分と他者、周囲の環境に対してどのような結果がもたらされる可能性がありますか。
- ・ CASの学びの成果のどれを達成できる可能性がありますか。

CAS活動がすべて、CASの学びの成果の達成に結びつかなければならないわけではありません。ただし、生徒は、CASプログラムの終了時点で、学びの成果をすべて達成したことを示す根拠を提出しなければなりません。

CASの段階表

CASの段階表（キャサリン・バージャー・ケイ氏の提唱する five stages of service learning を応用、Cathryn Berger Kaye, 2010）は、生徒がCASで何をしたいかを考え、計画を立て、それを実行する過程を支える枠組みとなり、またCASのプロセスに連続性をもたらします。CASの段階は、創造性・活動・奉仕の3つの要素、またCASプロジェクト全体にあてはめて使用することができます。

CASの段階表は、プロセスと流れを表すもので、生徒の生活のさまざまな側面に役立つ可能性があります。そのプロセスとは、好奇心や疑問を感じる興味の対象を自分で調べ、学習を進めることによって準備し、何らかの行動に移し、その過程で自分の行動を振り返って、自分が理解したことや自分がたどったプロセスを実際に示すというものです。これらの各段階をCASに適用することで、生徒は自信を持ち、また柔軟性に富んだ考え方をもてるようになるため、将来起こり得る状況にも確信をもって対応できるようになります。

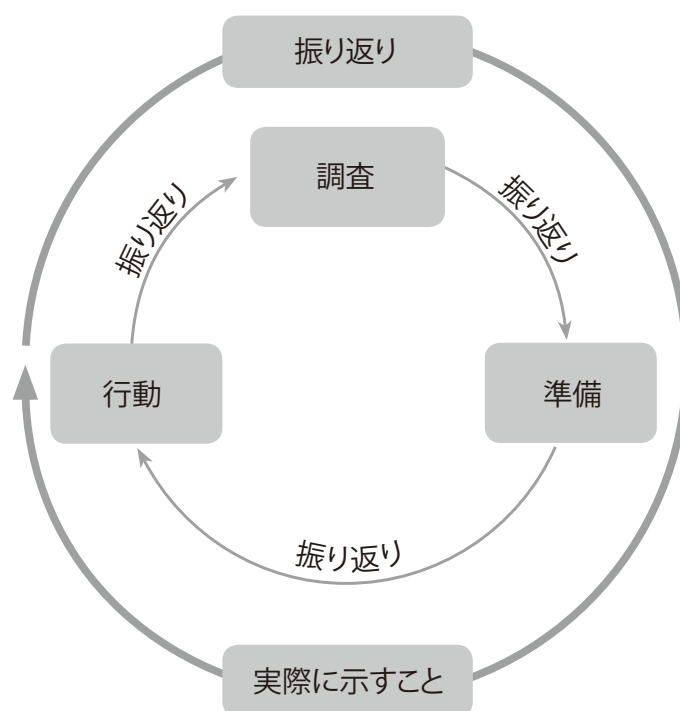


図4

CASの5つの段階

CASの段階は、この図が示しているとおおり、2つの部分から成っています。内側の円は、**調査、準備、行動、振り返り**という4つの主なプロセスを表しています（振り返りは、重要な経験をすごとに断続的に行います）。外側の円は、**振り返りと実際に示すこと**という2つの要素から成り、生徒が自分の経験を総括する際の道しるべとなります。

CASの5つの段階は以下のとおりです。

1. **調査**：CAS活動として何ができるかを考えるにあたって、まず自分の興味、スキル、才能、さらに人間としての成長や能力向上の余地のある部分を自覚します。そして、自分のやりたいことを調べてみて、CAS活動の目的を決めます。奉仕に取り組む場合は、対応しようと思うニーズを明らかにします。
2. **準備**：CAS活動に伴う役割と責任を明確に理解し、行動計画を立て、具体的なリソースとスケジュールを確認し、その経験に必要なスキルがあればそれを身につけます。
3. **行動**：アイデアや計画を実行します。この過程ではしばしば、意思決定や問題解決を行います。一人で行動するだけでなく、パートナーと一緒に、あるいはグループで行動してもかまいません。
4. **振り返り**：何が起きたか、何を感じたか、どんなアイデアを思いついたか、どんな疑問を感じたかを説明します。振り返りはCASの間に随時行うことができ、その目的は、理解を深めるため、計画変更に役立てるため、経験から学ぶため、さらには自分の成長、功績、学びの成果との間で明確なつながりを見つけて自覚を高めるため、などです。振り返りは新しい行動につながるきっかけとなるかもしれません。
5. **実際に示すこと**：何をどのように学んだか、何を達成したかを明確にし、例えばCASポートフォリオを通じて、あるいはその他の公式・非公式な方法で、CAS活動を他人と共有します。この実際に示すこととコミュニケーションを通して、生徒は自分の理解を固め、他の人の反応を喚起します。

CASの段階表は、以下のことを達成するための枠組みを生徒に提供します。

- ・ 自己認識を高める
- ・ 学習について知る
- ・ 新しい未知の課題に挑む
- ・ さまざまな学びのスタイルを実践してみる
- ・ 他の人とコミュニケーションをとり、共に活動する能力をつける
- ・ 人間として成長し、それを自覚する
- ・ IBの学習者像の特質を身につける

1回限りのCAS活動の場合は、調査、準備、行動のどれからでも始めることができます。継続的なCASの体験の場合は、調査から始めるのがよいでしょう。継続的なCAS活動の過程では、生徒は行動の段階から調査や準備の段階に立ち返って、新しいアイデアや関連するアイデアを着想したり発展することもできます。

CASコーディネーターは、CASアドバイザーや他のスタッフ、それにCASを行う生徒がこのCASの段階表を理解したうえで確実に活用してCASのプログラムを進めていけるよう、確認する必要があります。

CASの段階表を生徒が理解できるよう促していくためのリソースについては、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料(TSM)』を参照してください。

CASの3つの要素

創造性 (creativity)

独創性や解釈に基づいた作品やパフォーマンスの創造につながるアイデアを出し発展させること

CASの「創造性」は、独自の思考や表現を探究する機会をもたらします。創造性は、生徒の才能、興味、情熱、感情、想像力などから生まれ、その表現方法は無限にあります。これには視覚芸術や舞台芸術、デジタルデザイン、執筆、映画、料理、工芸、作曲などがあります。自分にとってなじみのある領域を越えて、型にはまった思考から型にはまらない自由な思考へと視野を広げるような、クリエイティブな取り組みをすることが奨励されます。

音楽、絵画、演劇など、特定の創造性の形式ですでに高い能力を発揮している生徒の場合は、その枠を広げ、スキルを深めることもできます。その得意分野のなかで新しい課題や目標を定めて、CASの創造性を満たすことができます。例えば、音楽が得意な生徒であれば、ギターソロ演奏曲を作曲して演奏する、美術が得意な生徒であれば、新しい彫刻や写真集を制作する、演劇が得意な生徒であれば、オリジナルの戯曲作品を上演するなどです。新たな可能性に向かって努力することで、課題を克服する方法を見つけたり、自分の長所を認識してさらに好奇心を高め、挑戦を続けていったりするようになるかもしれません。創造的な表現を生徒が発表するにあたっては、さまざまな方法で作品やパフォーマンスを披露することができます。例えば、録音・録画されたものを披露する、プレゼンテーション、展示、ソーシャルメディア、公開討論などです。CASの創造性は、コンサートや展示会に行くといった、他者の作品を鑑賞する行動では満たされません。

創造性の実践は、DPのコース内容からインスピレーションや情報を得て行うことができます。例えば、視覚芸術のコースで習得したスキルを使って創造性の新しい課題や目標に取り組んだり、デザインテクノロジーのコースの要素を活用して新しい表現方法を見つけたりすることができます。ただし、創造力を発揮するという経験は、DPのコースの要件とは区別しなければならず、それをDPのコースの要件に含めたり、要件を満たす目的で使うことはできません。

他のCAS活動と同様に、生徒は創造力を発揮するという経験を振り返ります。自分にとって意義のある出来事が起こった時やインスピレーションを受けた時を、振り返ることができます。創造力を発揮するという経験は、生徒の振り返りの仕方にインスピレーションをもたらす可能性もあります。例えば、美術、音楽、物語、ブログ投稿、写真、寸劇、その他の方法を通じて振り返ることが考えられます。

創造性へのアプローチ

創造性には多数のアプローチがあります。

- ・ 継続的な創造性：学校のグループやクラブ活動の一環として、またはその他の持続的な方法で、すでに創造的な取り組みにかかわっている生徒がいるかもしれません。その場合は、創造性の経験の一部としてその活動を続けることができます。ただし、必要に応じて、その取り組みを拡大したり発展させたりするよう奨励することができます。
- ・ 学校での創造性：生徒は、意義ある創作活動に取り組み、独自の思考や表現を探究すべきです。学校内にも生徒の参加できる適切な創造性の機会があるかもしれません。例えば、学校のCASプロジェクト、クラブ活動、授業などで、創造力を発揮するという経験をすることが考えられます。
- ・ コミュニティーでの創造性：地域コミュニティ内の創造性の取り組みに参加することによって、生徒は特に、他者との対人関係についての意識や理解を深めることができます。創造性の経験は、定期的に従事して、人間関係を構築・維持しながら、生徒が才能、興味、情熱、感情的な反応、想像力を培っていけるのであれば理想的です。例えば、地域内の劇団に入る、コミュニティのアートギャラリーに作品を提供する、公園の彫刻を制作する、料理のクラスを受けるといったことが挙げられます。
- ・ 個人単位の創造性：一人で創造力を発揮するという経験に取り組むこともできます。例えば、作曲、ウェブサイトの作成、短編小説シリーズの執筆、家具のデザイン、美術や工芸の制作、何枚かの肖像画を描いてみるなどといったことです。このような創造性の経験は、長期間にわたって従事するのが最も有意義です。自分なりの目標を設定して、その達成のために持続的に努力するよう奨励することもできます。このような個人単位の創造力を発揮するという経験の場合は、必要に応じて生徒と事前にどのようなリスクがあるかの確認を行うべきでしょう。

活動 (activity)

健康的なライフスタイルに役立つ身体的な活動を実践すること

「活動」のねらいは、生涯にわたって続くような健康的な習慣を身につけることにあります。具体的には、個人またはチームのスポーツ、有酸素運動、ダンス、アウトドア・レクリエーション、フィットネス・トレーニング、そのほか健康的なライフスタイルに役立つ身体的な活動が含まれます。真に挑戦しがいのある活動とするため、適度なレベルで定期的に参加することが勧められます。

生徒の置かれた状況や文化的な要因によって身体的な活動への参加に影響がある場合は、学校が配慮しなければなりません。また、肢体に不自由のある生徒も、この要素に参加する機会を与えられなければなりません。CASのすべての生徒が、それぞれにとって

適切なやり方で、健康的なライフスタイルに役立つ身体的活動という基本要件を満たす必要があります。

適切な活動にすでに定期的に参加している生徒には、その参加の度合いを高めたり、幅を広げたりするよう奨励します。自分の目標を引き上げたり、別のトレーニング方法を試してスポーツのスキルを高めたり、あるいは新しいスポーツに参加したりすることができます。かなり専門的にスポーツに取り組んでいる学生選手の場合は、計画的な厳しいトレーニング・プログラムを行うことで十分です。国によっては、教育課程で体育の受講が義務づけられています。標準的な体育のコースの受講は、CASのガイドラインに沿っているのであれば、活動の経験と見なされます。

他のCAS活動と同様に、生徒は活動の経験を振り返ります。自分にとって意義のある出来事が起こった時やインスピレーションを受けた時を、そのタイミングとすることができます。

活動のアプローチ

活動には多数のアプローチがあります。

- ・ 継続的な活動：学校のチームやクラブ活動の一環として、またはその他の持続的な方法で、すでに身体的な活動に取り組んでいる生徒がいるかもしれません。その場合は、活動の経験の一部としてそれを続けることができます。ただし、生徒は、CASの原則を踏まえて目標を立てるべきです。また、必要に応じて、それまでの取り組みを拡大したり発展させたりするよう奨励することができます。
- ・ 学校での活動：生徒は、健康づくりに役立つ意義ある活動に取り組むべきです。学校内にも生徒の参加できる適切な活動の機会があるかもしれません。例えば、学校のカリキュラム、スポーツのクラブ活動、授業などが考えられます。バスケットボールやテニスなどの校内活動を生徒が自主的に始めたり、学校内の他の生徒と一緒に取り組むこともできます。
- ・ コミュニティーでの活動：地域コミュニティ内の活動の取り組みに参加することによって、生徒は特に、他者との対人関係についての意識や理解を深めることができます。ただし、1回限りの活動では深さや意味に欠ける場合があります。活動の経験は、定期的に従事して、人間関係を構築・維持しながら、生徒が健康を増進させていけるのであれば理想的です。例えば、1回限りの地域のマラソン大会に参加するよりは、地域内のランニング・クラブに入ったり、ダンスやエアロビクスのクラスを受講したり、学校外のスポーツクラブに参加するといったことが奨励されます。
- ・ 個人単位の活動：一人で活動の経験に取り組むこともできます。これには、ジムでの運動、サイクリング、ローラースケート、水泳、筋力トレーニングなどがあります。このような活動の経験は、長期間にわたって従事するのが最も有意義です。自分なりの目標を設定して、その達成のために持続的に努力するよう奨励することもできます。このような個人単位の活動の経験の場合は、必要に応じて生徒と事前にとどのようなリスクがあるかの確認を行うべきでしょう。

奉仕 (service)

コミュニティーの真のニーズに対応して他者と共に活動しかつ相互の取り組みに従事すること

「奉仕」のねらいは、コミュニティーや社会に対して自分がどのように貢献できるかを理解することです。奉仕を通じて生徒は、意思決定、問題解決、自主性、責任感、自分の行動に対する説明責任などが求められる実社会のなかで、自分の人間関係のスキルを適用し、それを発展させる機会を得ます。奉仕は、CASの要素のなかでも最も生徒の人生観に大きな影響を与える要素のひとつと見られています。自己認識を高め、さまざまなふれあいや経験の機会をもたらし、国際的な視野を育てる機会をもたらすためです。有意義な経験をするには、CASの段階表を用いて奉仕の経験を発展させることが奨励されます。

CASの奉仕は、関係するすべての人に恩恵をもたらします。生徒はコミュニティーの真のニーズを見つけ、それに対応するなかで学習し、コミュニティーは共に働きかつ相互の取り組みを通じて恩恵を受けます。奉仕は、IBの使命と学習者像に沿った能力、態度、価値観を育みます。このため、CASの奉仕は無償で行います。

「コミュニティー」の定義を考える際は、状況や文化に配慮する必要があります。コミュニティーとは学校を意味する場合がありますが、奉仕の経験では学校の枠を超えて、地域や国や国際的なコミュニティーに視野を広げるのが望ましいでしょう。また、コミュニティーのニーズを調べる、奉仕の計画を立てる、そのアイデアを実践するといった段階では、他者と共に働きます。

CASコーディネーターは、生徒が地域社会のなかで奉仕するメリットを常に考慮すべきです。地域社会とかかわることで、人間関係を構築し、持続的な変化を観察してそれに参加し、共に活動することを通して課題に対応することができます。生徒は、ローカルな視点から知識や思考を拡大させて、グローバルな問題を理解できるようになります。また、他の市町村、国、さらには別の大陸にいるCASの活動を行う生徒と協力して、地域内の奉仕をグローバルな取り組みに拡大することもできます。テクノロジーの発達によって、ネットワークの開拓や取り組みの共有、パートナーシップの形成、影響力を発揮する機会などが生徒たちにもたらされるようになっていきます。

他のCAS活動と同様に、生徒は奉仕の経験を振り返ります。自分にとって意義のある出来事が起こった時やインスピレーションを受けた時を、その機会とすることができます。

サービスラーニング (奉仕活動を通じた学習)

CASの奉仕は、サービスラーニングのモデルを使ってアプローチすることができます。サービスラーニングとは、知識とスキルを習得して、コミュニティーのニーズを満たすために適用していくことです。これはリサーチを基本としたアプローチで、生徒はしばしば、カリキュラムで学習したトピックに関連する奉仕活動を選び、またその学習を通じて習得したスキル、理解、価値観を活用します。サービスラーニングは、生徒がすでにもっている知識やバックグラウンドに根ざすことにより、学問領域と奉仕経験の間につながりをつくれます。

CASの段階表を使ったサービスラーニング

サービスラーニングのアプローチとしては、CASの段階表を用いることが奨励されます。どのような形式の奉仕であっても、調査、準備、行動を通して明らかになったニーズを満たすべきです。また、重要な経験をするたびに振り返ることで、問題解決と選択に役立つ情報がもたらされます。さらに実際に示すことで、起こったことを他の人と共有できます。サービスラーニングのためのCASの段階表は、生徒たちに役に立つ、そして助けとなるアプローチを提供します。各段階を通過しながら、科目で習得したスキルや知識を活かして奉仕の経験に役立てることができます。

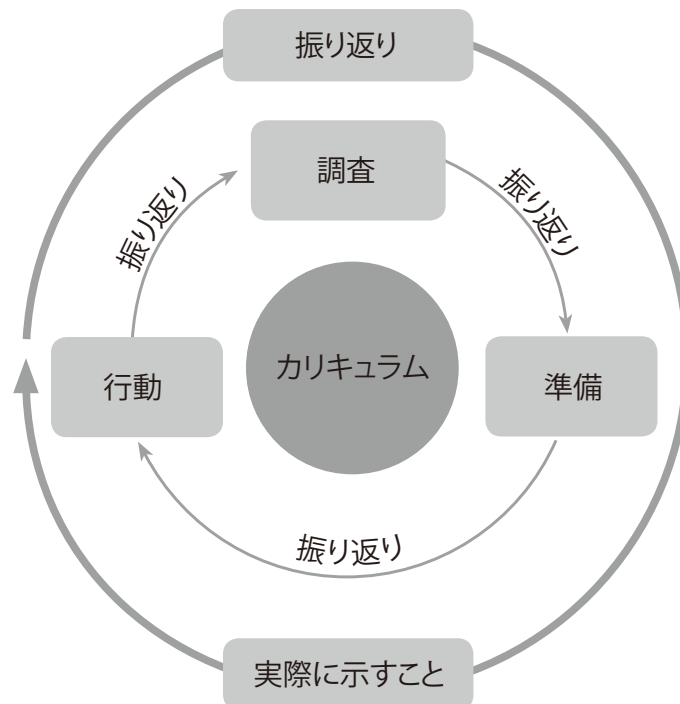


図5

サービスラーニングのためのCASの段階表

サービスラーニングの段階は以下のとおりです。

1. **調査**：コミュニティーのニーズを特定し確認したうえで、選択した課題を社会的に分析します。これはしばしば、コミュニティーのなかのパートナーと一緒にを行います。生徒は、自分の興味、スキル、才能、そして成長の余地のある部分についてすでに認識しているため、自分の優先順位と能力、および特定のニーズに基づいて取り組みを選択することができます。
2. **準備**：特定したニーズに合った奉仕の計画を立て、その計画をうまく実行するために必要な役割と責任、リソース、スケジュールなどを明確にします。この段階

では、コミュニティーのなかのパートナーがいれば、その人に相談をすることもあ​るでしょう。また生徒は、その経験に必要な知識とスキルを習得します。

3. **行動**：計画を実行します。これには、直接的な奉仕、間接的な奉仕、提言、リサーチといった行動が含まれます。生徒は一人で行動するだけでなく、パートナーと一緒に、あるいはグループで行動することができます。
4. **振り返り**：個人、コミュニティー、世界という観点から、自分が考えたこと、感じたこと、行動したことを考察します。サービ​スラーニングでは、振り返りがより頻繁に行われます。これは、新しい状況に置かれたり新しい洞察を得たりする結果、生徒が重要な出来事を多く認識するためです。
5. **実際に示すこと**：何をどのように学んだか、何を達成したかを明確にし、例えばCASポートフォリオを通じて、あるいはその他の公式・非公式な方法で、サービ​スラーニングの経験を他人と共有します。この実証とコミュニケーションを通して、生徒は自分の理解を深め、他者からの反応を呼び起こします。

4 種類の奉仕活動

CASのプログラムでは、さまざまな種類の奉仕活動に参加することが奨励されます。活動の種類は以下のとおりです。

- **直接的な奉仕**：他者、環境、または動物などのかかわり合いをもちます。例えば、ひとりの子どもに対して勉強をみてあげる、難民の人々と協力して菜園をつくる、動物保護施設で働くといったことがあります。
- **間接的な奉仕**：間接的な奉仕では、生徒は受益者と直に接することはありませんが、自分の行動がコミュニティーや環境にとって有益であることを確認します。例えば、非営利団体のウェブサイトのデザインを刷新する、言語学習のための絵本を書く、植樹のための苗木を育てるなどです。
- **提言**：公共の利益にかかわる問題について行動を促す目的で、運動に参加します。例えば、飢餓についての認識向上キャンペーンを開始する、いじめの対策としてお互いへの敬意を訴えかけるような演劇作品を上演する、水源の維持についてのビデオを制作するなどです。
- **リサーチ**：重要なトピックについてさまざまな情報を集め、データを分析し、報告することにより、政策や現状に影響を及ぼそうとします。例えば、学校の運営方法に影響を及ぼすために環境調査を行う、動物の移動や渡りについての研究に参加する、公共の場のごみを減らす有効な方法を調査する、ホームレス、失業者、孤独といったトピックの聞き取り調査を行って社会的なリサーチをするなどです。

奉仕のアプローチ

奉仕には多数のアプローチがあります。

- ・ 継続的な奉仕：長期にわたる行動計画が求められるニーズについて調べることにより、生徒は忍耐力と責任感を身につけます。自分の考えや行動が意味をなすのは、他者の努力があってこそであり、それがなければ変化は起こらないということを学びます。生徒の振り返りのなかに、彼らが社会問題についてより深く認識し、学ぶことができたということが表われてくるかもしれません。
- ・ 学校での奉仕：学校外のコミュニティーに恩恵をもたらす奉仕が奨励されていますが、学校内にも適切な奉仕の機会はあるはずです。どのような場合においても、特定のニーズが掘り起こされ、生徒の行動によってそれが満たされることが確認されなければなりません。学校内でニーズを満たす行動をとることにより、より大きなコミュニティーで行動する準備ができる可能性があります。例えば、学校内で下級生の勉強をみてあげた経験が、コミュニティーセンターで個人指導をするための準備となるかもしれません。
- ・ コミュニティーでの奉仕：地域コミュニティーの奉仕に参加することで、社会問題とその対策について意識と理解を深めることができます。ただし、個人を対象とした1回限りの奉仕では、深さや意味に欠ける場合があります。できれば定期的に多くの人々を対象に奉仕を行って、すべての人に恩恵をもたらすような人間関係を構築して維持していくのが最善です。例えば、高齢者施設を1回だけ訪れるのではなく、定期的な訪問スケジュールを立てれば、相互に影響・恩恵のある経験とすることができます。
- ・ 緊急のニーズに応える奉仕：生徒たちはしばしば、災害などの援助活動にすばやく参加したいと考えます。すばやくニーズを見極めて、対応するための計画を立てるケースはよく見られます。あとでその問題について調べ、根本的な原因を理解するよう奨励することも重要です。これにより、奉仕の行動が終了した後でも、その全体像を理解することができます。知識を深める結果、生徒は継続的な支援活動に参加するかもしれません。例えば、予防策に取り組んだり、環境問題に対応できるコミュニティーづくりの活動に参加したりするようになることが考えられます。
- ・ 募金活動：望ましいアプローチは、生徒がまず、支援する団体や取り組む問題について理解することです。募金活動の方法を計画するにあたっては、自分の興味、スキル、才能を活用することができます。理想的には、生徒が団体と直接連絡をとって、集めた資金の責任を明確にすることです。募金の必要性の根拠を共有することで、それを他者に伝え、その社会問題について提言を行うことができます。また、直接的な奉仕、提言、リサーチなど他の方法も活用して貢献度を高めるよう促すこともできます。
- ・ 国際的な奉仕：海外での奉仕の機会を検討する前に、地域内の奉仕に参加することが奨励されます。国際的な奉仕活動に参加する際は、その活動特有のニーズ、背景

や状況を必ず理解し、自分がその活動に携わる理由、そして根拠を示します。国外のコミュニティーと直接的なコミュニケーションができない場合は、適切なサービスを提供している外部の組織と協力することができます。国際的な奉仕の活動を実りあるものにするためには、生徒が自国内の事情にも問題意識を持ち、それと海外で起きている問題との関連性を理解し、その問題を解決するために自分には何ができるかを考えることが必要です。商業的なサービスを使用する場合は、その業者がIBの使命とCASの要件のねらいに即していることを、学校が確認しなければなりません。さらに、学校はリスクチェックを行って、生徒の安全を確保しなければなりません。

- ・ ボランティア：他の生徒や他の学校、その他の外部グループが企画した奉仕の経験に参加するケースもよくあります。このような場合、事前に状況を理解して奉仕のニーズを知っておくことで、生徒にとっても有益な活動となるでしょう。適切な情報を得て準備しておくことで、生徒は自分の行動のなかに個人的な意義を見出すことができるはずです。ボランティアをする前に、CASの段階表を使用することが強く奨励されます。
- ・ カリキュラムから派生する奉仕：サービスラーニングの機会を念頭において教師は単元を計画します。生徒はこれに反応して行動する場合もあれば、そうでない場合もあります。例えば、環境と社会の授業で淡水の生態系について学んでいる間に、生徒は地域内の水道のシステムを観察し改善したいと考えるかもしれません。

CASプロジェクト

CASプロジェクトとは、他の人と協力して行い、十分な考慮を重ねて計画したうえで段階的に進めていくCAS活動です。創造性、活動、奉仕の要素のうち1つまたは複数を取り上げることができます。**CASを行う生徒は、CASのプログラム期間中に少なくとも1つのプロジェクトに参加する必要があります。**

CASプロジェクトの主な目的は、持続的な共に働く取り組みに参加することにあります。この取り組みを通じて、生徒は、チームワークの重要性や、発想と能力を交換することで達成できる成果の重要性を発見することができます。CASプロジェクトは、主体的に取り組む、忍耐力を発揮し、また協力、問題解決、意思決定などのスキルを習得するよう、生徒を促します。

CASプロジェクトには、何組かの生徒グループやより広いコミュニティのメンバーとの間の共同作業が含まれます。生徒はチームの一員としてこれに参加し、全員がグループに貢献します。プロジェクトを始めたり、その一部または全体に対して責任を担う機会が、生徒にもたらされます。また、共に働いて取り組むなかで、自分の興味やスキルや才能を高め、プロジェクトの計画や実施に役立てる機会ももたらされます。

CASプロジェクトでは、必ずCASの段階表を使用して、必須要件をすべて確実に満たします。

CASプロジェクトは、CASの要素のいずれか1つ、または複数を取り上げることができます。以下にその例を示しますが、これらはアイデアを出す際の参考であって、CASのプロジェクトの範囲や方向性を限定するものではありません。

- ・ 創造性：生徒のグループで壁画を制作する。
- ・ 活動：スポーツのチームをつくり、練習を重ねたうえで他チームとの試合に臨む。
- ・ 奉仕：助けを必要としている人たちのためのチューター・サービスを企画して提供する。
- ・ 創造性・活動：マーチングバンドの振りつけをする。
- ・ 奉仕・活動：地域コミュニティの人たちと一緒に庭園の植栽や手入れを計画し参加する。
- ・ 奉仕・創造性：「地域内の学校の子供たちがリュックサックを必要としている」というニーズを掘り起こして、リサイクル素材でリュックサックをデザインし作成する。
- ・ 創造性・活動・奉仕：地域内の高齢者施設に住む人たちのためのダンス・パフォーマンスを創作して練習し、披露する。

CASプロジェクトはすべて、目的と目標を明確にしたうえで計画します。生徒は個々に、その経験から得られる学びの成果を自分用に特定して、プロジェクトで自分が果たす役割や責任を見極めるのに役立てることができます。おそらく生徒は、プロジェクトを進めている最中や終了後に、さらなる学びの成果があったことを認識したり、想定していた学びの成果を変更したりすることになるでしょう。

CASプロジェクトは、計画から実施までに1か月以上使うことが望まれます。さらに長い期間にわたるプロジェクトは、参加者全員に幅広い機会をもたらすため、特に奨励されます。生徒はまず、地域内で実施するCASプロジェクトに参加し、さらにできればCASのプログラム期間中に複数のプロジェクトに参加することを目指すのが良いでしょう。

CASの期間中、生徒はCASプロジェクトの経験を振り返ります。CASプロジェクトは他者と共に活動を行うため、他の人と一緒に振り返りを行う機会を設けることで、さらにさまざまな側面を見ることができ、自分たちの努力の過程や個人としての成長について洞察を得るのに役立ちます。

サービスプロジェクト

奉仕の要素に取り組むCASのプロジェクトの場合は「サービスプロジェクト」と呼ばれます。これに参加する生徒は、活動に関わる人々の意見や彼らが真に望んでいることを考慮し、その意見や期待を考慮したうえで、意義ある真のニーズに取り組むことで、礼儀正しく互恵的な行動をとるようにしなければなりません。計画段階で、生徒の行動がどのような影響を及ぼし、どのような結果を招き得るかについて考えるようにしましょう。サービスプロジェクトは、できるかぎり、コミュニティーの人たちと密接にコミュニケーションをとって進めます。非営利団体や商業的な業者など外部の組織を利用する場合は、その組織がIBの使命とCASの要件に即していることを確認するため十分に配慮する必要があります。

社会的・文化的に多様なバックグラウンドをもった人々と接し、お互いを尊重できるようなサービスプロジェクトは、国際的な視野を育み、グローバルな問題に対して取り組む機会となり得ます。国際的なサービスプロジェクトは、目指す目標と成果が明確で、活動に関わるすべての人々に恩恵をもたらすという十分な期待がもてるものでなければなりません。サービスプロジェクトが生徒自身の地域コミュニティーの外で行われる場合は、何らかの継続性が望まれます。例えば、そのプロジェクトが実施されたコミュニティーについて調査し、プロジェクトが取り上げた問題について知識を深め、そのコミュニティーのための市民グループを立ち上げたり、あるいは自分の暮らすコミュニティーのなかでそれに関連したニーズを見つけ出し、その発見を行動に結びつけていくといったことが考えられます。このような行動は、次の学年のCASを行う生徒に良い刺激をもたらす可能性があります。

サービスプロジェクトでは、次の点を確認することが重要です。

- ・ そのプロジェクトに対して真のニーズがあり、協力する関係者がそのニーズを認めて合意していること
- ・ サービスプロジェクトを実施するコミュニティーに連絡窓口となる人がいて、良好な関係を保っていること（必要な場合のみ）
- ・ 生徒の参加が、現実的に無理のない範囲に設定されており、主催者側ともその点に関して理解がなされていること
- ・ 参加する生徒に対してリスクアセスメントが、明確に評価されていること
- ・ そのサービスプロジェクトが、学校の管理担当者によって承認されていること
- ・ CASの段階表をどのようにたどったかを示せること
- ・ 関係者全員がそのプロジェクトがもたらす恩恵を十分に評価していること

目的意識に支えられた関係をコミュニティーの人々と築き、持続的なサービスプロジェクトを実践することは、すべての関係者に最大の満足をもたらすでしょう。コミュニティーのニーズが変化するのに伴って、生徒の反応も進化して、新しい状況に対応していくべきです。ある生徒のグループが開始したサービスプロジェクトを別の生徒のグループが引き継ぐ場合は、ニーズが今も存在していることを確かめ、必要な調整を行って、自分たちの行動が有意義であることを確かめなければなりません。

振り返り

はじめに

振り返りをするのは、IBの学習者像の特質のひとつです（これは次のような言葉で説明されています）。「私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます」。

振り返りは、CASを深みのある豊かな経験にするうえで欠かすことができません。振り返りを行うことを「癖にする」ことで、生徒は振り返りとはなにか、それはどう行うのかということを理解し、自分にとって最適な方法とタイミングも見極められるようになっていくでしょう。生徒の学びは、選択と行動を振り返ることで高められていきます。これにより、自分のスキル、長所と短所、成長すべき点を探究する能力が育まれます。生徒は、振り返りを通じてアイデアを検討し、今までに学んだことをどのようにして新しい状況に活かすかを考えます。振り返りは、将来の可能性にCAS活動がどのように影響するかを探究するだけでなく、問題解決の能力を磨き、高いレベルの認知的なプロセスを使って物事を深く理解することにつながります。

DPの「学習の方法」^{アプローチ}の思考スキルにおいては、生徒たちにさまざまな状況のもとで振り返りを実践できるように指導していくことの重要性が強調されています。CASの振り返りを意義あるものとするには、学校が入念な計画を立て、振り返りの実践を習慣にするよう生徒に促していく必要があります。振り返りのスキルは、科目横断的な、明確な指導によって最も効果的に定着させることができます。この結果、生徒がこのプロセスの価値を認識して、自分で振り返りを行うようになるでしょう。

CASの振り返りには、生徒に以下の機会をもたらすという意図が込められています。

- ・ 学びを深める
- ・ 経験したことの意義を考える
- ・ 個人と集団の価値観を探究する
- ・ 知識、スキル、特質の活かし方を認識する
- ・ 長所と成長すべき点を認識する
- ・ 自分と他者についての理解を深める
- ・ 経験を大きな文脈にあてはめてとらえる
- ・ 重要性の高いアイデアや質問を考える
- ・ 個人として、また集団としての選択と行動をどのように改善できるかを考える
- ・ これまでに学んだことを新しい状況に活かす
- ・ 建設的なフィードバックのやりとりを行う
- ・ 思慮深く振り返ることを継続的な習慣にする

振り返りの要素

振り返りとは、自分のことを知り、学び、意思決定するための、ダイナミックな手段です。CASの振り返りのプロセスは、4つの要素で構成されています。最初の2つは、振り返りの基礎を形成する要素です。

- ・ 起こったことを説明する：記憶に残った瞬間を思い出して、何が重要だったのか、何が大きな影響力を示したか、何がうまくいったか、何が難しかったか、どんな壁にぶつかったか、何に成功したかを明らかにする。
- ・ 気持ちを表現する：その経験について、自分が感情的にどのように反応したかを説明する。

次の2つは、ものの見方を深め、広げるための要素です。

- ・ アイデアを出す：選択と行動を見つめ直し、再考することで、自分自身についての認識と状況への認識が高まる。
- ・ 質問をする：人々、プロセス、問題点について問いを投げかけることで、さらに深い考察と継続的な探究が促される。

振り返りを発展させる

振り返りの4つの要素を十分に理解したうえで、考えたことや感じたこと、また行動したことを客観的に考察し、学習を統合していくことによって、さらに高いレベルの思考スキルを養うことができます。知の理論（TOK）のコースで生徒が習得する批判的^{クリティカル・シンキング}思考のスキルは、振り返りを発展させ拡大するのに役立ちます。例えばTOKでは、「知るための方法」として感情、理論、言語の働きについて考察します。

生徒たちには、より深い問いを自分に投げかけることでさらに前進できることを認識させるよう促します。例えば、次のような質問です。

「自分は何をしたか」という質問は、次のように発展させることができます。

- ・ 自分はなぜ、その選択をしたのか。
- ・ この経験は、自分の個人的な考えや価値観をどのように反映しているか。
- ・ どのようなことを通じて、自分や他の人について違った考え方をするようになったか。

「自分は何を感じたか」という質問は、次のように発展させることができます。

- ・ 目の前に現れた障壁について、どのように感じたか。
- ・ その感情を引き起こした原因は何だったのか。
- ・ どのような選択をすれば、違った感情や結果が生じ得たか。

振り返りをしたうえで、CASコーディネーターまたはアドバイザーからのフィードバックや仲間からのフィードバックを受けることは、さらに有益であり、また必要でもありません。フィードバックは、生徒が自分でわかったと思ったことや、考えたことを再確認し、明確化するのに役立ち、さらなる成長の機会となります。フィードバックの形式は、公式・非公式の多数の形式があり、例えばブログの投稿への返答、グループ討論会、生徒

同士の2人1組の会話などが挙げられます。生徒はまた、自分が好むフィードバックの方法をリクエストすることもできます。

振り返りのタイミング

意味のある振り返りが行われているかどうかは、量ではなく質の問題です。どのような時に、どのような方法で、またどのような頻度で振り返るかは、生徒自身が決めることです。CAS活動すべてについて振り返りをする必要はなく、生徒は適切な時を見極めれば良いでしょう。振り返りは、自分の意思で行うことによって、最も意味あるものとなります。振り返りの必要回数や「すべてのCAS活動で振り返りをする」といった要件を定めて量的な側面に重点を置けば、振り返りは義務となり、CASの振り返りの目的に反します。

望ましいのは、生徒の自主性に重点を置き、CAS活動の間に振り返りをしたいと思う瞬間を自分で見つけるよう促すことです。これには次のようなアプローチが役に立つかもしれません。

- ・ 振り返りのきっかけとなる重要な瞬間を生徒が選択する。例えば、以下のような時。
 - 発見があった時
 - スキルを習得した時
 - 難しい課題に直面した時
 - 感情が揺さぶられた時
 - 賞賛に値する何かを達成した時
- ・ 1回限りのまたは継続的なCAS活動の過程もしくは終了時に振り返りを行い、重要な瞬間を見つけ、考えられる学びの成果について議論し、個人的な成長と達成したことを認識し、次のCAS活動を計画する。
- ・ 仲間と一緒にグループで振り返りを行い、共有している考え方を見つける。
- ・ CAS活動の開始時、途中、終了時に振り返りを行う。これにより、計画、機会、期待、障壁、進歩、自己成長などについて、生徒が熟考できる。

振り返りを通じて、CAS活動の概念とプロセスと価値を理解する機会がもたらされます。意義と自覚を高める経験を経て、生徒は、振り返りを実践し応用して、それを生涯続く習慣へと昇華させていくことができるようになります。

振り返りの形式

CASの振り返りは、生徒の自由意思を尊重した形式にする必要があります。振り返りについて事細かに指定すれば、誰かの期待を満たすための義務であるかのような印象を与えかねません。生徒はまだやっていないからという理由だけで、「振り返り」と称するものを手早く済ませようとするかもしれません。一方、振り返りの目的とプロセスをしっかりと理解している生徒は、適切なタイミングと方法を選んで、どれだけの時間を割くかも自分で決めるでしょう。このように自主性と責任感をもつことで、生徒はより率直に振り返りを

行って、自分の考えをよく表現するようになり、学びの成果をはじめ豊かな洞察を身につけることができるでしょう。最終的な目標は、生徒が自分で振り返りをできるようになることです。

振り返りの形式は無限にあります。CASを行う生徒は、自分にとって意味があり、自分の経験を最も探究しやすい表現の形式を見つけられるでしょう。例えば、以下のようなものがあります。

- ・ ハイキングの途中で写真を撮っておき、それを見ながら振り返りの文章を書く。
- ・ 2人の生徒が、どのように子供たちを支援したかを歌にして作曲する。
- ・ 創造性の経験についての気持ちを表現した詩を戯曲化する。
- ・ CAS活動をまとめた短いビデオを制作する。
- ・ グループで共有した経験を表現したポスターを制作する。

自分にとって親近感があり、また楽しみにもなる形式を選ぶよう促すことで、振り返りは自己発見の手段となります。物事の間につながりを見つけ、選択と結果の関係を認識して、自分と他の人の経験に対して感受性豊かに対応することができます。

生徒の振り返りは、文章、対話、詩、漫画、演劇、手紙、写真、ダンス、その他の方法で表現できます。自分の興味やスキルや才能を活かすことで、価値や目的も見い出せるようになるでしょう。振り返りとは、内省的なものであったり、外部の人と共有するものであったりするのだということを、生徒は発見します。

生徒が振り返った内容を自分の心の内に留めておきたいと思うこともあるかもしれませんが。このため、どの振り返りをCASポートフォリオに記載するかは、生徒が自分で決めるようにします。生徒は、7つの学びの成果のそれぞれを達成したという根拠になる振り返りを、CASポートフォリオに含めます。

振り返りとは

振り返りを説明するひとつの方法として、何が振り返りで、何が振り返りでないかを明らかにすることがあります。振り返りのプロセスについての議論を始めるにあたって役立つのが、他の生徒と協力して比較表を作成させることです。例えば、生徒は以下のような表を作成して、これについて話し合うことができます。

振り返りであるもの	振り返りではないもの
<ul style="list-style-type: none"> ・ 率直である ・ 個人的である ・ さまざまな方法で行われる ・ 困難なこともある ・ 簡単なこともある ・ 創造的なこともある ・ 自己認識を高める ・ 学習に必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 強制される ・ 正解と間違いがある ・ 良いか悪いかが評価される ・ 成績や点数がつけられる ・ 難しい ・ 誰かが言ったことを写す ・ 予測できる ・ 他の人に判断される

振り返りであるもの	振り返りではないもの
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が何をしたか、どのように感じたかを考える ・ 驚く ・ 計画に役立つ ・ 一人でしたり、他の人と一緒にしたりする ・ 考え、感情、アイデアについて考える ・ ものの見方を増やすことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 起きたことのまとめにすぎない ・ 誰かを喜ばせるためにするもの ・ 時間の無駄 ・ 文章だけ ・ 議論だけ ・ 教師が指導して行う

CASコーディネーターは、以下のことを行って、生徒の振り返りの方法を導いていきます。

- ・ 振り返りを定義する：これには、何が振り返りで何がそうでないかを明確に示すこと、振り返りにとって不可欠な要素を示すこと、例を示すことが含まれる。
- ・ 振り返りの手本を見せる：CASコーディネーターは、自分自身の振り返りの方法を共有することができる。振り返りとはどのようなものか、どのように行うかの例を見せて強調する。
- ・ 振り返りを誘導する：さまざまな学習スタイルに対応した多様な振り返りの方法に生徒を参加させる。
- ・ 振り返りを共有する：現在や過去の生徒の振り返りを共有する（事前に生徒の許可を得る）。
- ・ 振り返りを促す：思慮深い答えを引き出すような質問、文章、経験を提供する。

振り返りとCASの学びの成果

振り返りは、CASコーディネーターが生徒による7つの学びの成果の達成を確認する際の主な証拠となります。ただし、すべての振り返りが学びの成果には言及していなければならないというわけではありません。

CASに従事している間、生徒たちは公式・非公式の振り返りの機会を得ることによって、学習の成果を確認する根拠を集めることができますでしょう。個人的な知識を深め、IBの生涯学習者として成長するためには、以下の2つの間でバランスのあるアプローチをとるのがベストです。

- ・ 助言を受けながら公式的な方法でCAS活動を振り返る機会
- ・ 多様かつ非公式な方法でCAS活動を振り返る機会

振り返りのプロセスを生徒が理解できるよう促していくためのリソースと戦略は、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料』を参照してください。

CASポートフォリオ

CASを行う生徒はすべて、CASに参加して7つの学びの成果を達成したことを示す証拠として、CASポートフォリオに記録をつけ完成させることが期待されています。CASポートフォリオは、生徒がどのようにIBの学習者像としてその特質を伸ばしたかを示すものでもあります。

CASポートフォリオは、生徒がCASのプログラムを計画し、CAS活動を振り返り、CASの取り組みの証拠を集めるために使用するものであって、正式に評価されるものではありません。CASコーディネーターまたはアドバイザーは、生徒が常にCASポートフォリオを更新して最新の情報を書き込み、有意義に使っていることを確認しなければなりません。CASポートフォリオは、生徒のCASのプログラムを総括する記録となるからです。また、就職活動や大学の入学志願の際に履歴書と一緒に提出できる貴重な資料となる可能性もあります。

CASの期間中に3回の面談を行い、この際にCASポートフォリオについて話し合い、適切な助言をして生徒を励まします。この面談の記録やその際に提案されたことは、簡潔にまとめて生徒のCASポートフォリオに含めるべきです。懸念が生じた場合、特に生徒がCASを完了できるかどうかの問題になりそうな場合には、そのことをCASポートフォリオに記録し、できるだけ早い段階で適切な対応をとりましょう。CASコーディネーターまたはアドバイザーは、CASポートフォリオを定期的に確認します。

CASポートフォリオは、生徒のCASプログラムの様子を示す目的で使用し、生徒が自分で誇りに思えるようなものである。その重要性を強調するため、CASポートフォリオの構成とそこに何を記録し、どのように共有するかを、生徒は自分で選択できます。デジタル、オンライン、日記、日誌、スクラップブック、または複数の方法の組み合わせなど、どのようなタイプのポートフォリオを使うかは、生徒一人ひとりの学習スタイルによって決まってくるでしょう。生徒には、さまざまな選択肢を試してみるよう奨励します。

IBではCASポートフォリオのフォーマットを特に指定していませんが、「プロフィール」、「経験」、「証拠」の3つの部分から成るポートフォリオが、生徒にもCASコーディネーターにとっても使いやすいかもしれません。この3つの部分はいずれも、生徒がCASの取り組みをより良く理解し、経験を振り返り、経験の証拠を示せるよう意図したものになるはずです。

注： この3つの部分による構成は、ポートフォリオの整理方法のあくまで一例であって、他にもたくさん方法があります。最も効果的な方法を決めるにあたっては、生徒本人の意思が尊重されるべきです。

プロフィール：このセクションには、自分の興味、スキル、才能、さらにCASのプログラムの計画と目標を記録します。CASを始めるにあたって、生徒は、CASの3つの要素に即して自分の興味を書き出し、CAS活動となりそうなものを特定します。また、プロフィールを作成する際は、生徒の個人的な価値観がIBの示した価値観とどう重なるかを、特にIBの学習者像に焦点をあてながら考えるのもいいでしょう。CASを行うことによって自分がどう変化していくかを見つめるために、プロフィールは重要な役割を果たします。CASのねらいと学びの成果を理解することにより、CASプログラムの短期的・長期的な目標を特定できるようになるでしょう。

経験：このセクションでは、CASの歩みを順次記録していきます。さまざまな振り返りの記録や何かを学んだ瞬間、自分で達成したこと、さらにCASの段階表をどのように使用したかなどを記していきます。このセクションは、生徒が自分のCASプログラムに積極的に取り組んだことを示す記録となるでしょう。CASの期間を通じて、生徒は振り返りの内容を書き加え、継続的な自己成長と自己認識について記録を残していくことができます。

証拠：このセクションでは、CASに取り組み、達成したことの証拠を集めます。証拠には、計画書、手紙、電子メール、修了書、参加証明書や実績認定書、写真、ビデオなどが含まれます。CASの取り組みを学びの成果に関連づけたり、CASのプログラムに関係した今後の目標やCAS終了後の将来の抱負などに考えを発展させたりすることもできます。

CASポートフォリオのタイプ

CASポートフォリオには、決まった形は存在しません。それを見極めるのはCASコーディネーターの裁量ですが、生徒に選択肢を与えることで、取り組みへの意欲を高めることができるでしょう。スクラップブック、ビデオ記録、ブログ、ファイル、学校のウェブサイトなど、個性を発揮できる方法を生徒が好む場合もあります。

学校は、CASポートフォリオの提出方法に関して、ウェブサイト、ブログ、一般に販売されているデータベースなど、特定のプラットフォームを決めることもできますが、生徒にそれぞれ自由に選ばせることもできます。方法を選ぶ際には、CASコーディネーターまたはアドバイザーにとってアクセスしやすいかどうか、公開か非公開か、コストはどの程度か、アップロードの機能はどうか、受理できる媒体のタイプは何かなどを考慮します。

CASプログラムを支える6つの構成要素

CASのプログラムを実施し発展させるうえで、以下の6つの構成要素が重要な役割を果たします。

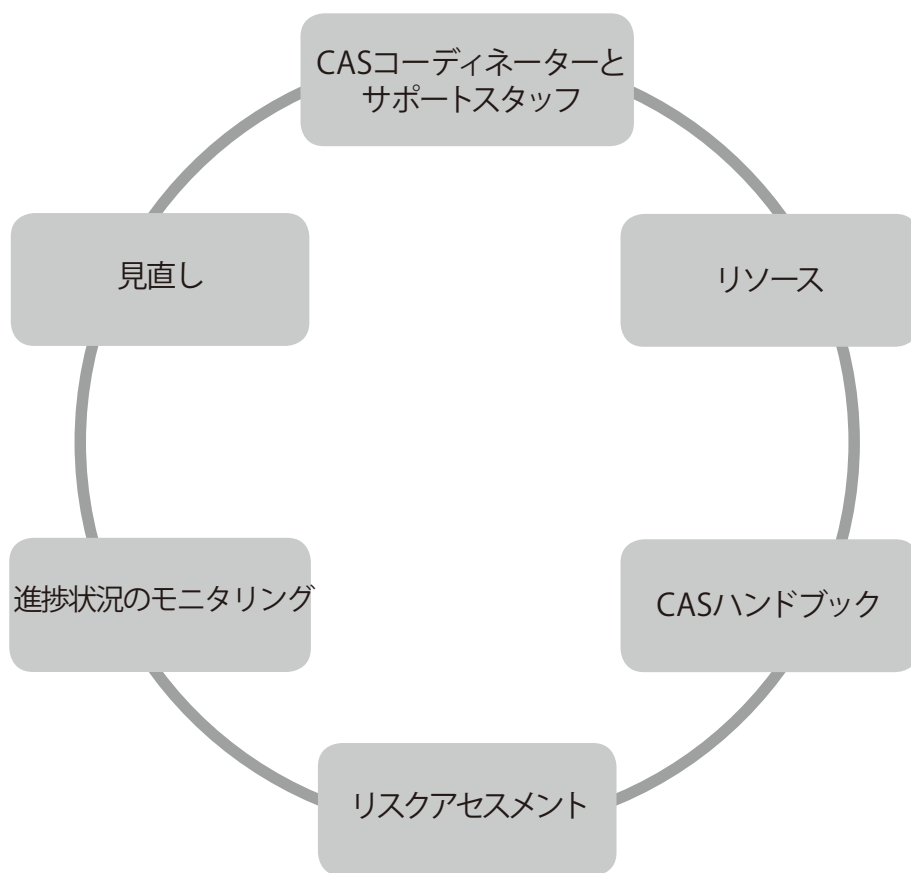


図6

CASプログラムの6つの構成要素

CASコーディネーターとサポートスタッフ

IB資料『プログラムの基準と実践要綱』では、CASプログラムの適切なリソースの確保と調整に学校が十分な予算を割りあてることが定められています（基準B2：1aのDPの要件）。このリソースには、CASコーディネーターを任命することや、適切かつ多様性のあるCASプログラムを支援することが含まれ、学校の業務責任の一環としてCASコーディネーターに時間を与えることも含まれます。規模の大きな学校では、CASアドバイザーまたはCASスーパーバイザー、もしくはその両方を任命して、CASコーディネーターと生徒を支援します。CAS担当チームの専門能力開発のために十分な時間を確保することも優先事項のひとつとされます。

学校は、以下の点を確認する必要があります。

- ・CASコーディネーターが、学校内の教務主任的な立場を有していること
- ・CASプログラムが、生徒にとって貴重な機会として位置づけられていること
- ・CASのねらいと学びの成果を達成することが、学校全体で重視されていること
- ・CASプログラムの実施と管理のための時間が確保されていること
- ・振り返りやCASの他の段階について明示的な指導をするための時間が確保されていること
- ・生徒とスタッフが、CASプログラムのすべての側面を理解していること
- ・CASプログラムと生徒の活動状況について、保護者に十分な連絡がなされていること
- ・生徒の参加できるCASの機会が明確であること
- ・CASの機会を実現するため、コミュニティとの長期的な関係が構築されていること
- ・生徒がCAS活動を選択できるようになっていること
- ・生徒がCASコーディネーターやアドバイザーから指導とフィードバックを受けるための機会が設けられていること
- ・CASで達成される成果が実証されていること
- ・CASコーディネーターがCASのリスク評価をするために必要な支援が提供されていること

CASコーディネーターの役割

CASコーディネーターは、CASのプログラムを成功させるうえできわめて重要な役割を果たします。CASコーディネーターは、DPのなかでCASが担う役割を熟知してい

ます。また、CASに対する理解を促し、CAS活動の有意義な実施を監督する目的で、スタッフのなかから任命されます。CASコーディネーターは、生徒、スタッフ、CASアドバイザー、CASスーパーバイザーと直接かかわり、またDPコーディネーターに生徒のCASの活動状況を報告する責任を負います。

DPの修了時点で生徒がCASの学びの成果を達成したかどうかを最終的に判断するのは、CASコーディネーターの責任です。また、IB資料『DP手順ハンドブック』に従って報告する責任も負います。

CASコーディネーターは、特に次の2つの分野の責任を負います。

1. CASプログラムを実施し発展させるなかで、以下のことを行う。
 - 生徒、教員・スタッフ、保護者、およびコミュニティにCASに関する理解を促す
 - 生徒、教員・スタッフ、保護者、およびコミュニティにCASの重要性を訴える
 - 安全上の問題点を特定する（リスクアセスメントと生徒の保護）
 - 学校独自のCASハンドブックとリソースを作成する
 - CASの予算を管理する
 - CASの記録と報告を管理する
 - 定期的に生徒と面談する
 - 生徒の活動状況を学校と保護者に報告する
 - CASで生徒が達成したことを告知・発表する
 - CASの方針を立て、それが守られているか確認する
 - CAS担当チームのなかでリーダーシップを示す
 - CASアドバイザーを監督し、必要に応じてアドバイザー研修を行う
 - 必要に応じてCASスーパーバイザーと協力し、情報を提供する
 - CASアドバイザーおよびスーパーバイザーと連絡をとり、プログラム全体の一貫性を確認する
 - CAS活動に関与する外部組織と協力し、情報を提供する
 - IBインフォメーションシステムを使ってCASの完了状況をIBに報告する
2. (CASアドバイザーがいない場合) CASを行う生徒と直接かかわって、以下のことを行う。
 - CASプログラムのあらゆる側面について生徒の理解を育む
 - CASの学びの成果の意味と目的について生徒の理解を育む
 - IBの学習者像の特質を明確にし、生徒の成長を支援する
 - 倫理的な配慮や国際的な視野について生徒が理解できるようサポートする
 - 個別面談、グループ討論、戦略的な指導などを通じて有意義な振り返りのスキルを育てる（『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料(TSM)』)

- 生徒の振り返りに対してフィードバックを提供する
- 生徒による個人目標とグループ目標の設定を支援する
- CASを行う生徒と定期的に面談して、目標と達成したことを話し合う
- 継続的な指導と支援を生徒に提供する
- 生徒が取り組んでいる経験の範囲やバランスを確認する
- 生徒がCASの学びの成果を達成できるよう、状況を確認してアドバイスする
- 生徒のCASポートフォリオを定期的に確認する
- 生徒と正式な面談を3回行って、その内容を記録に残す

CASアドバイザーの役割（任命される場合）

生徒一人ひとりのCASプログラムに携わるには、時間をかけ、その生徒のことを理解する必要があります。生徒数の多い学校では、CASコーディネーターの下に複数のCASアドバイザーから成るチームを置くことが強く奨励されます。CASアドバイザーは、DPにおけるCASの重要性を認識し、CASのすべての要素を熟知していなければなりません。CASアドバイザーが任命される場合は、CASコーディネーターではなくCASアドバイザーが、生徒と継続的にかかわっていきます。CASアドバイザーが生徒と十分な時間を取って接することは、きわめて重要です。CASアドバイザーの責任は、CASコーディネーターの責任の2番目のセクションに書かれているとおりです。

CASスーパーバイザーの役割（任命される場合）

CASスーパーバイザーは、必要に応じて生徒のCASの体験を監督し、支援と指導を提供します。生徒がCAS活動に際して支援や監督を必要としないのであれば、CASスーパーバイザーは必要ないかもしれません。生徒は、自分のCAS活動に対してできるかぎり責任を負い、出席状況や参加状況について自主的に報告すべきです。学校は、生徒の経験の性質を考慮したうえで、生徒を指導・支援し、安全を確認し、生徒の活動について学校に報告する役目としてスーパーバイザーが必要かどうかを決定すべきです。CASスーパーバイザーは、学校の教師が兼任できるほか、教員以外の学校職員や地域の方、あるいは生徒の従事する経験に関してのスキルや知識のあるボランティアの方などが務めることができます。

CASスーパーバイザーは、以下のことを行います。

- ・ CASプログラムの関係部分の要素について知識をつける
- ・ 生徒の安全を確認し、リスク管理の手順の責任を負う
- ・ CAS活動についての指導、支援、フィードバックを生徒に提供する
- ・ 振り返りを促す
- ・ 必要に応じて生徒のCASの取り組みについてコメントする

リソース

学校には、実用的なリソースとなり得る人や場所があるものです。IB資料『プログラムの基準と実践要綱』で述べられているとおり、「学校は、プログラムの一環として行われる学習を充実させるため、地域社会のもつリソースや専門性などを活用」します（基準B2:11）。効果的なCASプログラムとは、学校コミュニティ全体のリソースを活用するものです。

学校コミュニティのメンバー全員がCASへのコミットメントを示すことは、DPの認定校となるうえで必須の要件です。このため学校は、必要な予算、時間、人員、研修、リソースを提供して、CASプログラムを成功に導かなければなりません。予算やリソースの規模は、生徒数や地域の状況など、個々の学校が置かれた状況によって異なります。

CASがDPとその体系にとって不可欠な要素であり、そのためのリソースを確保することが学校の責任であるということを、常に忘れてはなりません。CASの体系づくりやリソース調達に生徒が貢献することはできますが、例えばCASの予算を確保するために生徒が募金活動をするといったことはあってはなりません。

内部のリソース

学校のスタッフ：教職員は、CASアドバイザーやスーパーバイザーとなる以外にも、さまざまな形でCASプログラムに貢献することができます。教師は、CAS活動を刺激する材料として担当の学問領域を使うことができます。また、生徒のCAS活動に役立つスキルや趣味、才能をもっているかもしれません。その学校のコミュニティの中でCASが重要かつ妥当な存在であるために、学校のスタッフは、CASプログラムについて十分に情報を得て、関与していくべきです。

生徒：生徒のなかには、音楽や美術、演劇、スポーツなどで秀でたスキルを発揮している者がたくさんいます。このようなスキルと専門性をもった生徒は、リーダーとなったり、発起人となったりして他の生徒や地域コミュニティと共にCASを展開し、貴重な貢献をすることができます。

保護者：保護者はさまざまな職業や興味をもっていることから、CASを行う生徒にとって有益なリソースとなります。保護者がCASプログラムに関与する場合は、CASの基本要素や保護者の果たすべき役割を理解していることを、CASコーディネーターが確認しなければなりません。

学校にあるリソース：学校には通常、CASにとって理想的な空間があります。校庭、プール、武道館、ジム、講堂、集会場、美術室、音楽室、教室、実験室、コンピューター室、キッチン、カフェテリア、技術作業室、庭園や菜園などです。

外部のリソース

有意義なCAS活動を生徒にもたらすことのできる各種の外部組織を見つけられるかもしれません。CAS活動を支援するため、以下のような外部の組織に生徒や学校のほうから連絡して、関係を築くことができます。

- ・ 非政府組織
- ・ 地域の商工業団体
- ・ コミュニティー・グループ
- ・ 青年グループ、スポーツクラブ、演劇・音楽・美術グループ
- ・ 社会福祉サービス、保健サービス、行政担当局
- ・ 大使館、領事館

CASでは、さまざまな文脈で幅広い経験に従事することを奨励しています。このため、CASコーディネーターやアドバイザーは、生徒のCASプログラムが1つの組織とのかかわりだけにならないよう確認しなければなりません。

ローカルや全国的な報道機関もリソースとして活用することができます。生徒のCAS活動を取り上げてもらうことで、地域コミュニティ内でCASの認知度が高まり、CASを行う生徒によって3つの要素にわたる活動や貢献が行われていることを認識してもらえるようになるでしょう。これを受けて、他の組織がCASプログラムのアイデアを提案・支援してくれるようになる可能性があります。

CASハンドブック

CASコーディネーターは、学校独自のCASハンドブックを生徒に配布しなければなりません。『創造性・活動・奉仕（CAS）指導の手引き』はCASコーディネーターとサポートスタッフ向けに書かれた資料であるため、生徒には学校の状況に即したCASのハンドブックを提供したほうが有益です。この手引きに盛り込まれた要素と『CAS教師用参考資料』は、生徒向けのハンドブックを作成するうえで役立ちます。ハンドブックは、生徒と保護者に対してCASの要件と生徒の果たすべき責任について説明する際に、欠かせない資料となります。

ハンドブックは、印刷物として提供することもできれば、ウェブサイトに掲載したり、デジタル資料の一部としたりすることもできます。学校の状況に即した内容とし、この手引きの「CASの本質」のセクションに説明されたCASの要素を盛り込んでください。

リスクアセスメント

IBとその学習者像の特質では、「挑戦する人」になることを奨励しています。しかしこれは、生徒や教師が不必要なリスクを冒したり危険な状況に身を投じたりすることを奨励しているわけではありません。リスクをとりながら安全を期すうえで鍵となるのは、そのリスクの性質を十分に理解し、また必要が生じた場合に危険をもたらしかねない状況の緩和方法を十分に理解する能力をもつことにあります。このため学校は、生徒をリスクから保護することと、CAS活動に参加させることの間で適切なバランスをとる必要があります。

参加者が危険にさらされるかもしれないCAS活動を計画する際は、リスクを特定し確認することが重要です。IBでは、**国や地域が定める教室内外における保健・安全に関する法律を学校が常に順守することを義務づけています**。さらにIBは、CAS活動の潜在的リスクを評価する際のガイドラインとして、以下を定めています。

1. CAS活動のリスクアセスメントを行い、リスクを緩和するために必要となる適切な制度が整備され運用されていることを、学校と教師が確認する。
2. CAS活動を企画・監督するスタッフに対して、リスクアセスメントのプロセスで十分な支援が提供されていることを、学校が確認する。
3. リスクアセスメントを行うことでCAS活動が制限されてしまうことを避けるために、学校はリスクのレベルに応じたリスクアセスメントの制度を適用させるものとする。すべてのCAS活動は適切に計画され評価されなければならないが、リスクの高い経験に比べてリスクの低い活動のリスクアセスメントは、手早く簡単に行われるべきである。
4. リスクが特定された場合は、潜在的な関係者全員（教員・スタッフ、生徒、保護者）にそのリスクのことを知らせ、さらにリスクを最小限に抑えるための予防策や緊急時の対応策についても十分に情報を提供する。

活動状況のモニタリング

学校側は、CASコーディネーターとCASアドバイザー（任命される場合）が生徒と十分な話し合いの時間をとっていることを確認するものとします。この話し合いの時間には、以下のことが含まれます。

- ・ 専用に時間を定めた情報提供のセッションを開催し、CASのプログラムをスタッフと生徒に紹介するほか、CASハンドブックなどの関連資料を配布して話し合い、CASの取り組みについて最新情報を提供し、CASで達成したことを認識・評価していく
- ・ DPを開始する前年の終了が近づいた段階で、翌年からCASに参加する生徒と1回面談を行う（可能であれば）
- ・ 2年間のDPの期間中に、CASを行う生徒と公式な面談を3回行う
- ・ 2年間のDPの期間を通して、CASを行う生徒と個人またはグループで、定期的かつ十分なミーティングをする

また、学校にはCASを通じて生徒のリーダーシップを育成することが奨励されています。これにより、生徒がリーダー役を果たし、CASプログラムの他の生徒に模範を示せるようになります。

CASプログラムは「生徒自身のもの」です。これは、教師は生徒が自分で決めたことを成し遂げるものとして信頼するということを意味しています。生徒にはその信頼に応えてほしいものです。しかし、なかにはそれが難しい生徒もいます。例えば、CAS活動を計画し開始しようとする時、CASプログラムで期待されることを理解しようとする時、3つの要素の間でバランスをとろうとする時、さらには難しい状況に直面した時などに、生徒が困難を感じる場合があります。CASコーディネーターとしては、こういった状況に気づくことがまず大切です。気づかなければ、援助や支援を申し出ることもできません。

CASの面談

生徒とCASコーディネーターまたはアドバイザーの間で最低3回の面談を行って、生徒の活動状況を話し合い、適切な助言をして生徒を励まします。面談は、DPの1年目に少なくとも2回、2年目に1回行います。この面談のフィードバックは、CASコーディネーターまたはアドバイザーが記録します。

面談の内容は、CAS進捗状況フォーム（『CASの教師用参考資料』の例を参照）やデジタル・カタログなどの適切な方法で記録します。懸念が生じた場合、特に生徒がCASを完了できるかどうかの問題になりそうな場合には、そのことをできるだけ早い段階で記

録し、適切な対応をとるべきです。3回目の面談では、CASへの参加実績を総括し、CASの7つの学びの成果の達成について話し合います。完了フォーム(『CAS教師用参考資料』の例を参照)を使うか、その他の適切な方法(デジタル・ログなど)を使用することが奨励されます。

CASコーディネーターは、IB資料『DP手順ハンドブック』に従って生徒が完了したかどうかを決定し、IBインフォメーションシステムに記録します。

1回目の面談

この面談は、DPの開始時に行います。CASコーディネーターまたはアドバイザーは、生徒がCASの要件を理解していることを確認し、CASの学びの成果とその達成方法を説明し、CAS活動について生徒の興味やアイデアを聞き、生徒が使用するCASポートフォリオの形式を決めたうえで、CASの段階を確認します。生徒がCASについてすでに知っている場合は、この面談で生徒の理解を確認し、計画やアイデアについて助言を与えることができます。

2回目の面談

この面談は、通常、DPの1年目が終了する頃に行います。この面談の主な目的は、生徒の活動状況を評価することです。生徒が幅広いCAS活動に従事して、CASの学びの成果を達成しているかどうかを知ることが、この面談の最大の関心事です。この段階ですでにCASプロジェクトを完了していたり、実施を計画したりしている生徒もいるかもしれません。この面談では、生徒のCASポートフォリオを参照しながら、7つの学びの成果の進捗状況などについて集めた根拠を確認します。

3回目の面談

これは、CASを総括するための面談です。DPの修了直前に行うのがよいでしょう。この面談では、どのようにCASの学びの成果を達成したかを生徒が説明します。さらに、CASプログラム全体について議論・評価し、自己成長についての振り返りをします。この面談でも、生徒のCASポートフォリオを参照します。3回目の面談では、その生徒の経験に基づいて、今後CASに取り組む後輩たちのためのプログラム開発について話し合うこともできます。

面談で問うべき質問の例については、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)教師用参考資料』を参照してください。

CASポートフォリオ

CASポートフォリオは、生徒が多様なCAS活動を記録し、達成したことをまとめて評価できるようにするものです。CASに参加したこと、そしてCASの7つの学びの成

果を達成したことを実証する証拠や振り返り（写真、映像、録音、文書、ポスター、イベントやパフォーマンスのプログラムなど）を集めたものです。

3回の正式な面談では、CASポートフォリオを参考資料として使用し、CAS活動と活動状況について話し合います。CASポートフォリオに常に最新の状況を記録できるよう、CASコーディネーターまたはアドバイザーが必要に応じて生徒に働きかけ、支援を提供します。CASポートフォリオは、生徒がCASで何を経験し、何を達成したかを示す貴重な証拠となります。

学校からの報告書

CASに関する学校からの報告は生徒の成績表に含め、そこにはCASの進捗状況を記録として示すべきです。この形式は自由ですが、どのような形式をとる場合も、生徒と保護者、さらに高等教育機関に対して生徒がCASプログラムにどのように取り組んだかを伝えるコミュニケーションの手段と位置づけるべきです。DPの修了時には、CASで達成したことを総括する文書を学校から生徒に提供することが奨励されます。この文書は、高等教育機関への入学志願にあたって役立つ可能性があります。

CASプログラムの見直し

CASコーディネーターは、CAS担当チームと協力してCASプログラムを継続的に見直し、プログラム全体にわたって一貫性が保たれていることを確認しなければなりません。

学校スタッフのCASに対する理解

CASコーディネーターは、学校スタッフ全員のCASプログラムに対する理解が向上するよう努めるべきです。指導計画とCASの間にどのようなつながりをつくれるかを教師と話し合うことにより、カリキュラムの内容を活用したり拡大したりしてCAS活動にすることができるということを、教師が積極的に示すことができます。

外部の組織やグループとのつながり

地域コミュニティなどで組織やグループとの付き合いの幅を広げることで、生徒がCASプログラムの3つの要素すべてを経験できるようにしていくこともCASコーディネーターの仕事です。CASコーディネーターと生徒を含む学校全体は、地域コミュニティとの連携の機会や地域行事への参加のチャンスなどを常に調べて記録していきましょう。

CASの認知度

学校内外のコミュニティにおいてCASの認知度を高めることで、強力し合って手薄になっているCAS領域の部分強化したり、生徒たちの成功を評価し、祝福できるようになります。認知度を高めるため、CASコーディネーターは次のようなことを実践できます。

- ・ 生徒のCAS活動と成果をアピールし、高く評価するためのイベントを企画する
- ・ 卒業生を招いてCAS活動について語ってもらう
- ・ 他のIB認定校から生徒を招いてCAS活動について発表してもらう
- ・ 学校のウェブサイト、ニューズレター、新聞、雑誌などでCASが大きく扱われるようにする
- ・ CASの成果を学校として正式に表彰することを検討する

CASの認知度を高める方法を検討するにあたっては、生徒のアイデアや参加を求めることも考えます。学校のCASプログラムの認知度を高める取り組みに生徒を参加させることで、CASがDPにとっていかに重要な側面であるかが再確認されます。

他校との関係

国内・国外を問わず他地域の学校と協力してCASを進めることもできるかもしれません。恒常的な関係を築いて長期にわたる持続可能なCASプロジェクトをつくることができれば、すべての関係者にメリットをもたらす可能性があります。CASコーディネーターは、オンラインカリキュラムセンター（OCC）のCASフォーラムを活用して、他校とのネットワークを築き、リソースを共有し、アドバイスを交換するとよいでしょう。CASの生徒も他校のCASを行う生徒に連絡をとって、アイデアを共有したり、共に働く可能性を探ったりすることができます。

異なる文化的背景をもつコミュニティとの取り組み

CAS活動は、文化についての認識や配慮を身につける機会となります。多様なコミュニティとの交流は、どのような場合においても、お互いを思いやるパートナーシップでなければなりません。CASの生徒は、他の文化や社会的なグループを決して下に見ることなく、豊かな多様性に対して常に価値を見出すよう努力すべきです。奉仕をはじめすべてのCAS活動で生徒がその経験の背景を理解していることを、関係する大人が確認しなければなりません。これには、文化、宗教、経済、言語の認識、さらに身体面と学習面でのサポートの必要性に対する理解が含まれます。

コミュニティ内での人とのかかわりが、異なる文化や社会への認識を深め、持続的な関係に結びつくのが理想的です。

CASを行う生徒が奉仕の対象とするニーズを見極める際には、関係するコミュニティや個人と事前に連絡をとり、聞き取り調査を行って、お互いに尊敬し合えるような関係の基礎を築くことが期待されています。このアプローチによって、相手にもたらされる利益が最大限に高まるだけでなく、生徒にとっての学習機会も最大化されます。理想的には、この事前の連絡と聞き取り調査は、相手とじかに面会して行い、生徒が直接関与すべきです。

奉仕の経験はすべて、相手の**ため**に行うものから相手と**一緒**に行うものへと進化し、共通の利益に向かってコミットメントを共有するものとならなければなりません。このような**共に働く**アプローチによって、全員にもたらされる恩恵が最大限に高まるでしょう。意義のある奉仕をするには、次のことが必要です。

- ・ 特定したニーズの根底に流れる貧困、非識字、高齢化、孤独、健康、環境の持続性といった問題の複雑さを理解すること
- ・ 奉仕を提供するニーズがあることを確認すること
- ・ 奉仕の経験のすべての段階を通じて、そのコミュニティの人々の権利と尊厳を守るような方法で接すること

サービスの経験を開発する過程では、生徒の置かれた状況やもっている能力に合ったレベルで生徒が主体的に進めるのが理想的です。例えば、CASプロジェクトで持続的・長期的な奉仕に取り組むのであれば、そのプロジェクトのニーズが現時点で存在することを理解し、また自分の行動が他の人にどのように役立つかを確認して、さらにCASプロジェクトの一側面を担う主体性を示さなければなりません。

多様な学習方法とその支援の必要性

IBワールドスクールは、IBのプログラムに取り組んでいるすべての生徒に公平かつ有意義なカリキュラムへのアクセスを提供しなければなりません。IB資料『プログラムの基準と実践要綱』で定めたとおり、学校は、生徒の多様性の価値を認め、個人個人の学び方の違いを尊重しなければなりません。これは、国際的な視野を育むうえで欠かせない要因であり、すべてのIBプログラムの重要な目標でもあります。学習に際して支援の必要な生徒に対し、平等にアクセスでき合理的な調整が行われていることを、学校は確認しなければなりません。また、この種の配慮は、IB資料『受験上の配慮の必要な志願者について』およびIB資料（英語版）『*Learning diversity in the IB programmes: Special educational needs within the IB programmes*（IB教育と学習の多様性：IBプログラムにおける特別な教育的ニーズ）』に沿って行われなければなりません。

生徒のなかには、身体的、医学的、精神的な状況のためにCASへの参加が難しい生徒がいるかもしれません。そのような状況すべてにあてはまる原則は、生徒に何が**できる**かを考えることであって、何ができないかを考えることではありません。生徒の未来を決めるうえで学校はきわめて重要な役割を担い、これには生徒の興味や才能を伸ばすことが含まれることを、決して忘れてはなりません。CASで生徒が直面する困難は、慎重に管理する必要があるかもしれませんが、CASのあらゆる側面で何らかの関与をすることが適切です。

必要であれば、学校は地域事務局へ連絡して、アドバイスを求めることができます。

価値観と信念の多様性

IBワールドスクールの多様性は、IBにとって貴重な財産です。IBでは、個人やコミュニティが独自の価値観や信念に沿って行動する権利を支持しています。このため生徒は、信仰、文化、政治にかかわるイベントに参加するという形でCAS活動に従事することができます。例えば、教会のチャリティーイベントの企画を手伝ったり、聖歌を演奏するために楽器を学んだりすることができます。人権援護グループなどの政治的な組織も、キャンペーン活動に参加する良い機会となります。また、ダンスや音楽のグループと活動することにより、伝統文化への理解を深めることができるかもしれません。

信仰、文化、政治にかかわるイベントへの参加は、生徒個人のCASプログラムに大きな価値をもたらす可能性があります。個人の価値観や信念に基づいたCAS活動を生徒が希望する場合は、原則としてCASコーディネーターが支援すべきです。しかし、なかにはIBの使命がうたっている価値観やCASの要件に反するものもあるかもしれません。

CAS活動が適切かどうかを生徒が判断するよう導いていくのは、CASコーディネーターの役割です。CASコーディネーターは、CAS活動を単純に許容可能か許容不可能かに分けるのではなく、生徒が提案しているイベントや組織の表す考え方や価値観を探究するよう生徒に働きかけ、それがIBの使命とCASの要件にどのようにあてはまるかを考えるよう促すべきです。

生徒が提案してくるCAS活動の妥当性について学校と生徒の間で合意を確立するため、CASコーディネーターまたはアドバイザーは、質問をして誘導していくことができます。これにより、CASコーディネーターと協力して原則に沿った決定を下す力が、生徒に与えられます。例えば、以下のような質問をして導くことができます。

- ・ そのイベントは、CAS活動のガイドラインに沿っていますか。
- ・ その経験は、学習者像のどの特質に主眼を置いたものですか。その経験に関係しない特質はどれですか。それはなぜですか。
- ・ そのイベントまたは組織は、個人や集団の違いを尊重していますか。
- ・ そのイベントまたは組織は、言語や文化、その他のものの見方、国際的な視野に対するあなたの理解を深めますか。
- ・ あなたがその経験をする組織は、どのような目標を表明していますか。その目標は、IBの使命やIBの学習者像とどのように重なりますか。
- ・ そのイベントは、環境に影響を及ぼす可能性がありますか。
- ・ その経験が法的にどのような位置づけとなるか、また健康や安全の面でどのような影響があり得るかを考えてみましたか。

CASの学びの成果の解説文

生徒が学びの成果を達成したかどうかは、生徒のCASポートフォリオで提示される証拠と、CASの面談中に収集した情報に基づいて決定されます。

証拠を用いてCASの学びの成果を実証することは、CASのプログラムでも重要な側面です。証拠を示すにあたって、生徒は、CASの学びの成果とは何か、それぞれの学びの成果が何を意味するのか、CASの何を表しているのかを理解していなければなりません。従ってどのような証拠を示すかは生徒とCASコーディネーターの両者にとって納得できるものでなければなりません。

CASの学びの成果の理解

学びの成果のそれぞれの文言とその意味について、CASコーディネーター、アドバイザー、サポートスタッフ、そして生徒の間で共通の理解をもたなければなりません。例えば、生徒には「挑戦」という言葉の意味をもう少し明確にする必要があるかもしれません。挑戦とは、まったく新しい未知のCAS活動を指す場合もあれば、今までの経験を発展させたものを指す場合もある、といった定義を確立する必要があります。コーディネーター、アドバイザー、サポートスタッフは、CASの学びの成果の達成方法が生徒によって異なるかもしれないことをあらためて認識し、生徒の達成したことを比較しない姿勢で望むのがベストです。CASの学びの成果を見る際は、生徒一人ひとりのCASの歩みの過程を認めることが欠かせません。

学びの成果の解説文

解説文を使って説明することで、生徒はCASの学びの成果をより良く理解できるようになるかもしれません。CASコーディネーターと生徒の間でそれぞれの学びの成果について話し合い、学校や生徒の状況に合わせた独自の解説文を作成することができます。

注：『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 教師用参考資料』には、「指導のストラテジー——CASの学びの成果を理解するための演習」という項目があります。

以下の表は、CASの学びの成果の解説文の例です。これらはあくまでも提案であって、必ずしも網羅的ではありません。これを調整・編集したり、加筆したりして使うことができます。また、解説文のすべての項目が満たされなければならないというわけではありません。CASの学びの成果を達成したかどうかの判断は、CASコーディネーターが生徒と一緒に下します。

CASの学びの成果

学びの成果1：自分の長所と成長すべき点を認識する

解説文の案

生徒は：

- ・ 自分の長所と短所を認識している
- ・ 改善と成長の機会に対して前向きである
- ・ 自分の興味や才能に合った取り組みを提案することができる
- ・ さまざまな経験に参加する意欲がある
- ・ 思慮深い自己評価をすることができる
- ・ さまざまな能力とスキルをもった個人として自分のことを認識し、能力やスキルのなかには比較的発達したものとそうでないものがあることを自覚している

学びの成果2：課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得したことを実証する

解説文の案

生徒は：

- ・ 自分にとって挑戦しがいのある経験に参加する（新しい経験でも、したことのある経験でもよい）
- ・ 未知の環境や状況にかかわる意欲がある
- ・ 新しいスキルや能力を習得する
- ・ 経験したことのある分野で専門性を高める
- ・ 経験したことのある分野で新たに習得したスキルや向上させた専門性を示す

学びの成果3：CAS活動を計画し開始する方法を示す

解説文の案

生徒は：

- ・ 調査、準備、行動、（継続的な）振り返り、実証のプロセスを経て、CAS活動のアイデアを考え、実行に移すまでの段階を詳しく説明することができる
- ・ 既存のCAS活動を発展させることにより、確かな知識と認識をもっていることを示す
- ・ 新しいアイデアやプロセスを考案して主体性を発揮する
- ・ クリエイティブなアイデア、提案、解決策を示唆する
- ・ 計画を立てたり主体性を発揮したりするにあたって、振り返りを組み込んでいる
- ・ 個人やグループのCAS活動を作成するうえでの役割と責任を理解している
- ・ CASプロジェクトの計画作成に対して責任感のある態度を示す
- ・ ねらいあるいは目的、活動、リソースを考慮に入れたうえで、一貫性のある行動計画を立てることができる

学びの成果4：CAS活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す

解説文の案

生徒は：

- ・ CAS活動とプロジェクトに定期的・積極的に取り組んでいることを示す
- ・ 当初の計画に問題が起こりそうなことを予見して、有効な代替案や対応策を考えることができる
- ・ 不確実なことや変化に対する順応性を示す
- ・ 長期的なCAS活動とプロジェクトにかかわる

学びの成果5：他の人と共に働くスキルを示し、その意義を認識する

解説文の案

生徒は：

- ・ スキルや知識を共有する
- ・ 仲間からの提案に耳を傾ける
- ・ チーム内でさまざまな役割を担う意欲がある
- ・ 異なるものの見方やアイデアを尊重する
- ・ 価値ある貢献をする
- ・ グループへの参加に責任を負う
- ・ 速やかに他の人を支援する
- ・ CAS活動を通じて感じた共に働くことのメリットや難しさを認識して実証し、批評的に議論することができる

学びの成果6：グローバルな意義のある問題への取り組みを示す

解説文の案

生徒は：

- ・ ローカルな問題のグローバルな意味合いを認識する
- ・ 地域内や国内のコミュニティーに表れているグローバルな問題を特定することができる
- ・ グローバルな意義のある問題についての認識を示し、地域、国、または国際レベルで問題に対応する適切な行動をとる
- ・ 地域、国、国際レベルでグローバルな問題に対応するCASプロジェクトに取り組む
- ・ 人類に共通する人間性に対する認識と責任を発展させる

学びの成果7：選択と行動の倫理を認識し、考察する

解説文の案

生徒は：

- ・ 倫理的な問題を認識する
- ・ 個人の倫理的なアイデンティティーに対して社会が与える影響を説明することができる
- ・ 計画を立てる際や倫理上の決定を下す際に、文化的な背景を考慮する
- ・ 倫理的な決定を下すために知っておく必要のあることを認識する
- ・ 倫理的な原則や倫理上の決定へのアプローチを明確に説明する
- ・ 自分の選択と行動に対する責任感を示す
- ・ 自分の選択と行動が、自分自身、他の関係者、およびコミュニティーに対してどのような影響を及ぼすかを認識している
- ・ 倫理上の決定をする際、振り返りのプロセスを組み入れる
- ・ CAS活動を計画し実行するなかで自分がする選択や行動から、さまざまな結果が起り得ることを認識する

教師用参考資料

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)の教師用参考資料』は、CASプログラムの付加的なリソースとして作成された資料です。CASプログラムの例、指導のストラテジー、さらに3つの要素やCASの段階表をはじめ、この手引きで言及された多数のトピックについての詳しい説明が記載されています。

CASプログラムの評価

学校は、5年ごとにプログラム評価と自己調査のプロセスを実施して、DPの実施状況の評価します。このプロセスの一環として、CASプログラムも評価します。2016年5月以降にプログラム評価の自己調査を提出する学校は、CASの計画・準備・実行がこの手引きに記載された要件を満たしているという証拠を提出する必要があります。

証拠には以下のものが含まれます。

- ・ CASハンドブック（ハードコピーまたはソフトコピー）
- ・ 確認作業、会議、面談のスケジュール
- ・ CASの予算
- ・ CASコーディネーターの職務説明書

これに加え、生徒が従事したCAS活動の例を提出して、以下のことを示す必要があります。

- ・ すべての学びの成果をどのように達成したか
- ・ 3つの要素（創造性、活動、奉仕）のそれぞれに生徒がどのように取り組んだか
- ・ CAS活動を生徒がどのように主体的に開始したか
- ・ グローバルな問題がどのように対応されたか
- ・ 少なくとも1つのプロジェクトで、3つの要素のいずれかまたは複数がどのように実践されたか

生徒のCAS活動は、評価期間の5年のなかから選ぶことができます。2017年5月以降に自己調査を提出する学校のための新しいCASの要件を記載したIB資料（英語版）『*Programme evaluation guide and self-study questionnaire: Diploma Programme*（プログラム評価ガイドおよび自己調査質問票：ディプロマプログラム）』改訂版は、2016年3月に発行予定です。この改訂版ガイドには、評価のプロセスと提出が必要となる根拠についての詳細が記載されます。

参考文献

CASの段階表は、以下の文献を参考にしました。

Kaye, C B, M.A. 2010. *The Complete Guide to Service Learning: Proven, Practical Ways to Engage Students in Civic Responsibility, Academic Curriculum, & Social Action* (Second Edition). Minneapolis, Minnesota, USA. (Free Spirit Publishing Inc. の許可を得て使用し、すべての権利は保護されています)

International Baccalaureate Organization. January 2014. *Programme standards and practices*. Cardiff, UK. IB Publishing.

用語解説

CASアドバイザー

この手引きの「CASアドバイザー」とは、CASを行う生徒一人ひとりやグループに対してCASプログラムに関する助言や支援を継続的にしていく教職員を指します。CASアドバイザーは、CASコーディネーターが主に主催する専門能力開発に参加して、自分の役割と責任を理解します。

CASスーパーバイザー

CASスーパーバイザーは、生徒のCAS活動を必要に応じて支援・監督し、助言を提供します。支援や監督がなくても生徒がCAS活動を実施できるのであれば、スーパーバイザーは必要ないかもしれません。

共に働くこと

共に働く経験とは、他の人と協力する経験を意味します。共に働くことには短期的なものや長期的なものがあり、CASプロジェクトの重要な側面です。

コミュニティ

生徒は、必然的にいくつかのコミュニティに所属しています（学校コミュニティ、地域社会のコミュニティ、友達のコミュニティ、民族や宗教によって定義されるグループなど）。CAS活動のなかには、生徒にとってなじみのあるコミュニティ内で行われるものもあれば、あまりなじみのないコミュニティの人が関与して、個人として、また集団としての成長の機会をもたらすものもあります。

CASコーディネーター

CASコーディネーターは、学校のCASプログラムの確立と監督に対して総合的な責任を負います。その役割を果たすため、サポート、時間、リソースを十分に与えられます。

経験

CAS活動とは、CASの3つの要素のうちいずれかまたは複数にかかわる特定の活動です。CAS活動は、1回限りの取り組みのこともあれば、長期にわたる一連の取り組みのこともあります。

グローバル

「グローバル」とは、地域を超える、または世界全体に関係する重要性や関連性があることを意味します。CASを行う生徒には、地域での経験とグローバルな状況の間につながりを見つけることが奨励されています。

面談

面談は、正式な対話と情報交換です。CASの期間中、生徒はCASコーディネーターまたはアドバイザーと3回にわたって、記録に残す正式な面談を行います。1回目はCASプログラムの開始時、2回目は1年目の終了時、3回目はプログラムの終了時です。

学びの成果

学びの成果とは、CASのプログラムの過程で生徒ができるようになることを明確に記述したものです。目的のはっきりした有意義なCAS活動を通じて、7つの学びの成果を達成するために必要なスキル、特質、理解力を生徒は高めます。

振り返り

振り返りは、CASにとって欠かせないプロセスです。個人的に考えたこと（認知）と感じたこと（感情）を熟考し探究するプロセスで、生徒の学習と成長に情報をもたらします。振り返りを通じて生徒は、自分の考え、スキル、長所、短所、成長すべき点を探究できるようになり、それまでに学んだことをどのようにして新しい状況に応用するかを考えられるようになります。振り返りは、公式・非公式のさまざまな方法で行うことができます。

新しい役割または挑戦

「新しい役割または挑戦」とは、生徒にとって新しい経験、または生徒が以前にしたことのある経験において役割や責任を発展させる経験を意味します。

ポートフォリオ

CASを行う生徒はすべて、CAS活動に参加したことを示す証拠、および経験を振り返って学びの成果を達成したことを示す証拠を集めることが期待されています。さまざまな形式のものを使用することができ、例えば、ブログ、日誌、美術作品、作曲、写真日記、または映像や録音の日記などがあります。

プロジェクト

CASの生徒はすべて、創造性・活動・奉仕のいずれかまたは複数にチームで取り組むCASプロジェクトにかかわります。プロジェクトの期間は最低1か月です。プロジェクトは特に、共に働くことと持続的な人間関係にかかわるスキルを伸ばす機会となります。プロジェクトを通じて生徒は、計画を立て、生じた問題に対応して計画を改良し、進捗状況や結果を振り返ることができます。

相互的な取り組み

生徒が奉仕の経験に参加する際、そのねらいは、関係者全員の尊厳を守り、関係者全員への敬意を維持するような相互的關係、すなわちお互いに交換する相互の利益を認識することにあります。

段階表

CASの段階表は、調査、準備、行動、振り返り、実証によって構成されています。生徒がCASで何をしたいかを考え、計画を立て、それを実行する過程を支える枠組みとなり、またCASのプロセスに連続性をもたらします。CASの段階は、創造性・活動・奉仕の3つの要素とCASプロジェクトで使用することができます（必須ではありません）。

要素

CASには、創造性、活動、奉仕の3つの要素があります。

持続性

CASにおける「持続性」とは、長い期間にわたって定期的に行われる継続的な経験、計画、行動を意味します。持続的なCAS活動は、決意の固さと粘り強さを発揮する機会をもたらす一方で、深い理解、継続的な計画、必要に応じた順応性、意義のある振り返りを行う機会にもなります。